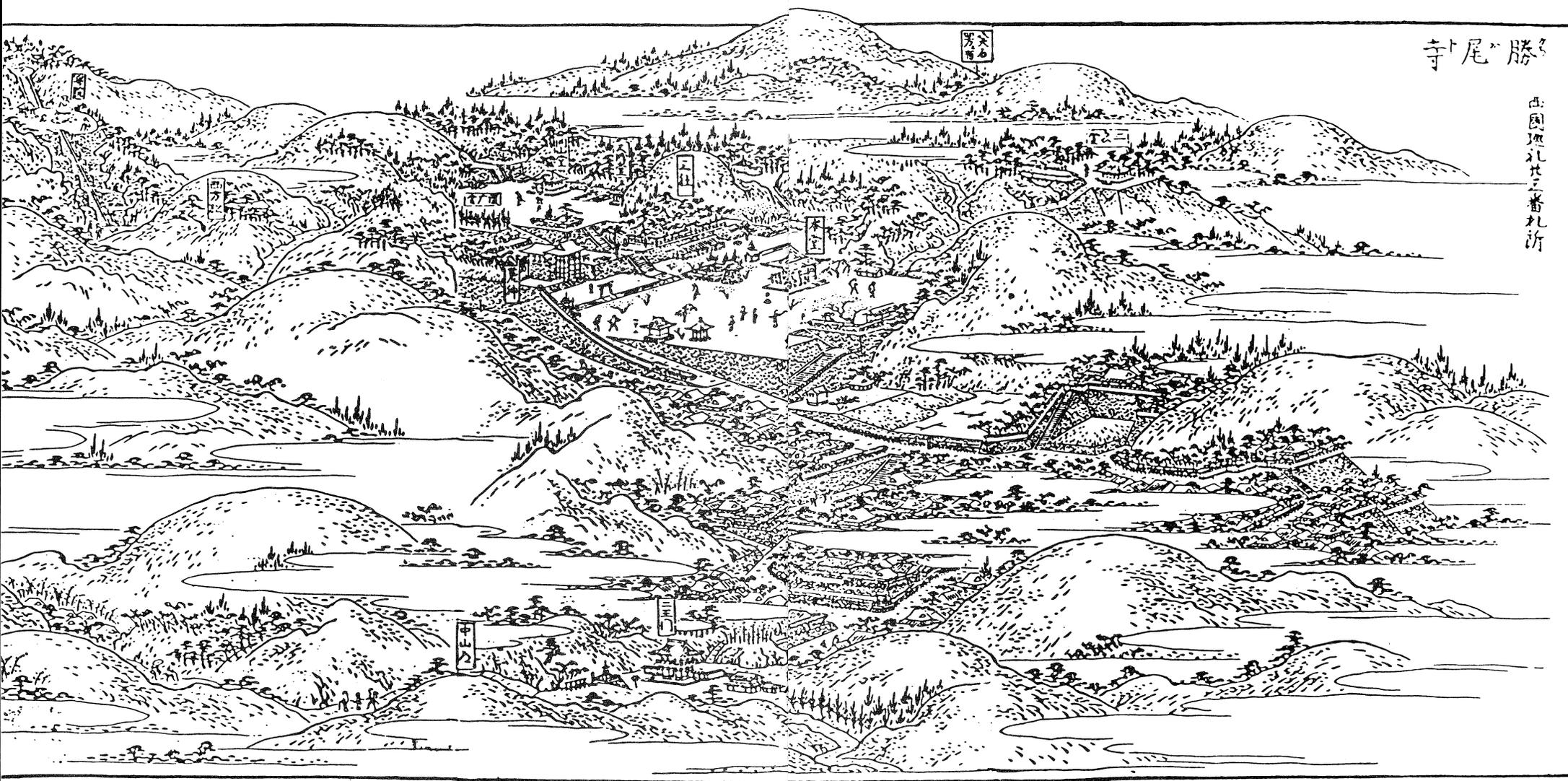


箕面の道
ーるべ

箕面市教育委員会

勝尾寺

出園地北共三番札所



攝津名所圖繪より

尤
京
六
一
み
乃

五
和
二
皮
舞
八
月
能
孫
三
八

序にかえて

中近世の本市は、西国街道を行き交う人々や、西国三十三所観音巡りの札所である勝尾寺、役行者ゆかりの瀧安寺等を参拝する人々で賑わいました。それにともない様々な道が設置され、道筋には多くの道標が建てられました。道標は長い年月の間、人々が道に迷うことなく安心して旅を続けるための大役を担っていました。が、車社会の到来とともに、しだいに忘れられた存在となり、撤去されたり、あるいは倒されて土の中に埋められたりして、年々減少し続けました。

しかしながら幸いにして近年、街道や旧道が「歴史の道」として評価されるようになり、これらの道を訪ね歩く人々が増えるにつれ、道標は再び見直されるようになりました。

路傍にたたずむ道標は、様々な困難を乗り越えて旅を続けた先人の足跡の一端を伝えるとともに、訪れる人に「土の道」を想起させ、限らない歴史のロマンを与えてくれます。

本誌は、市内に残された道標の集成であるとともに、道標を訪ねて散策される方の案内書になるように、旧道についても併せて解説していただきますので、道標の保護に役立つとともに、古道を訪ね歩く現在の旅人の「道しるべ」となりましたら幸いです。

最後になりましたが、多大なる熱意をもって本誌の作成に尽力されました、箕面市文化財愛好会の皆様方から敬意を表して序文にかえさせていただきます。

平成三年十二月

例 言

- 一、本書は箕面市文化財愛好会々員が昭和五十四年から市内文化財の調査を始め、冊子を作成するに当り平成元年六月から三年六月までに再調査して確認した道標八十一基の記録である。
 - 一、本書は、方向、距離、道筋を刻んだ標示物をすべて道標として記録した。(町石も里程を示すものとして取り上げた。ただし、近年の自然歩道の標識や交通標識は除いてある。)
 - 一、道標の材質は数基を除くすべてが花崗岩であるので、本文中での標記は省いた。
 - 一、道標に刻まれている判読不明の字は□(欠字)として記録した。
 - 一、勝尾寺の町石に刻まれている梵字については、鎌倉時代に建立された八基は箕面市史に金剛界の五仏を表わすと記録されている。しかし、江戸時代建立の十五基については、金剛界曼荼羅に含まれている他の諸仏を表わす梵字(イ、ラン、飛、ギーク、タラタ等)を認めることが出来る。本文では梵字の書取りと読み方のみを記したが、主尊名については勝尾寺参道町石一覧表に記載した。
 - 一、実測図はすべて十五分の一の縮尺で、単位はセンチメートルである。
 - 一、旧道、古道については、判明出来なくなった山道や、宅地開発で付けかえられている所があるが、確認出来る範囲の記録にとどめた。
- また、地元で呼ばれている名称を使用した。
- 一、現在個人所有又は旧位置不明の四基(七八〇八一)については地図、分布図への記載を省いた。

「箕面の道しるべ」作成委員会

目次

序にかえて

例言

一 西国街道

一 京・ふしみへの道しるべ

二 小野原く新田・山田道

二 しんでん・やまだの道しるべ

三 勝尾寺表参道

三 寄進標石

四 二階堂の道しるべ

五 三十六町石

六 三十五町石

七 三十四町石

八 三十二町石

九 三十町石

一〇 帝釈寺道の道しるべ

一一 二十六町石

一二 二十七町石

一三 二十八町石

一四 二十三町石

四

勝尾寺境内

一五	二十二町石	22
一六	十九町石	23
一七	十七町石	24
一八	十町石	26
一九	七町石	27
二〇	六町石	28
二一	五町石	29
二二	四町石	30
二三	三町石	31
二四	二町石	32
二五	一町石	33
二六	下乗石	35
二七	中山寺への道しるべ	39
二八	廿丁石	40
二九	鐘楼横の道しるべ	41
三〇	薬師堂前の道しるべ	43
三一	奥の院への道しるべ	45
三二	二階堂の道しるべ	46
三三	妙見山道の道しるべ	47
三四	歓喜天道の道しるべ	49

五

栗生間谷く勝尾寺道

- 三五 徳本寺の道しるべ 50
- 三六 光明院谷への道しるべ 51
- 三七 箕面・中山への道しるべ 53
- 三八 一丁石 54

六

今宮く勝尾寺道

- 四〇 名号碑前の町石 58
- 四一 中村天満宮の道しるべ 59
- 四二 西田橋畔の道しるべ 60
- 四三 十六丁石 62

七

勝尾寺く谷山尾根く如意谷く新稲く中山道

- 四四 今宮墓地の道しるべ 65
- 四五 今宮会館の道しるべ 67
- 四六 阿弥陀名号の道しるべ 69
- 四七 ウツギ谷下池の町石 70
- 四八 中山・大坂・帝釈寺の道しるべ 71
- 四九 勝尾寺への道しるべ 74
- 五〇 外院谷下り口の道しるべ 57
- 五一 政の茶屋・白島への三叉路の道しるべ 77
- 五二 白島の道しるべ 78

五三	如意谷の道しるべ	81
五四	サンプラザ入口の道しるべ	82
五五	新稲の道しるべ	83

八 高山道

五六	四丁石	86
五七	五丁石	86
五八	八丁石	87

九 勝尾寺く箕面道

五九	政の茶屋の道しるべ	89
六〇	三宝荒神の道しるべ	91
六一	一丁目石	92
六二	箕面公園の道しるべ	93
六三	六丁目石	94
六四	西江寺の道しるべ	95
六五	箕面駅前の道しるべ	96

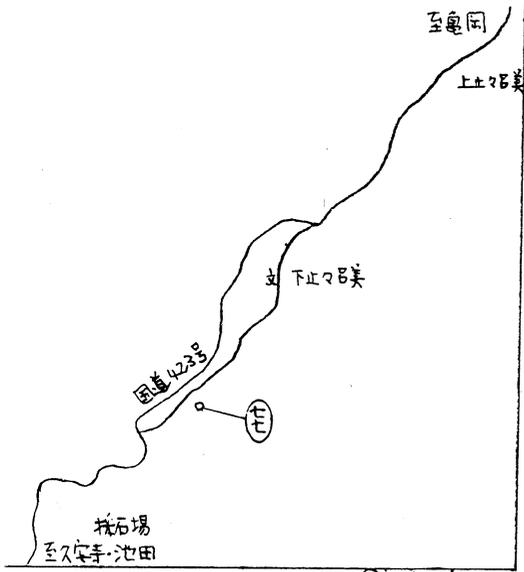
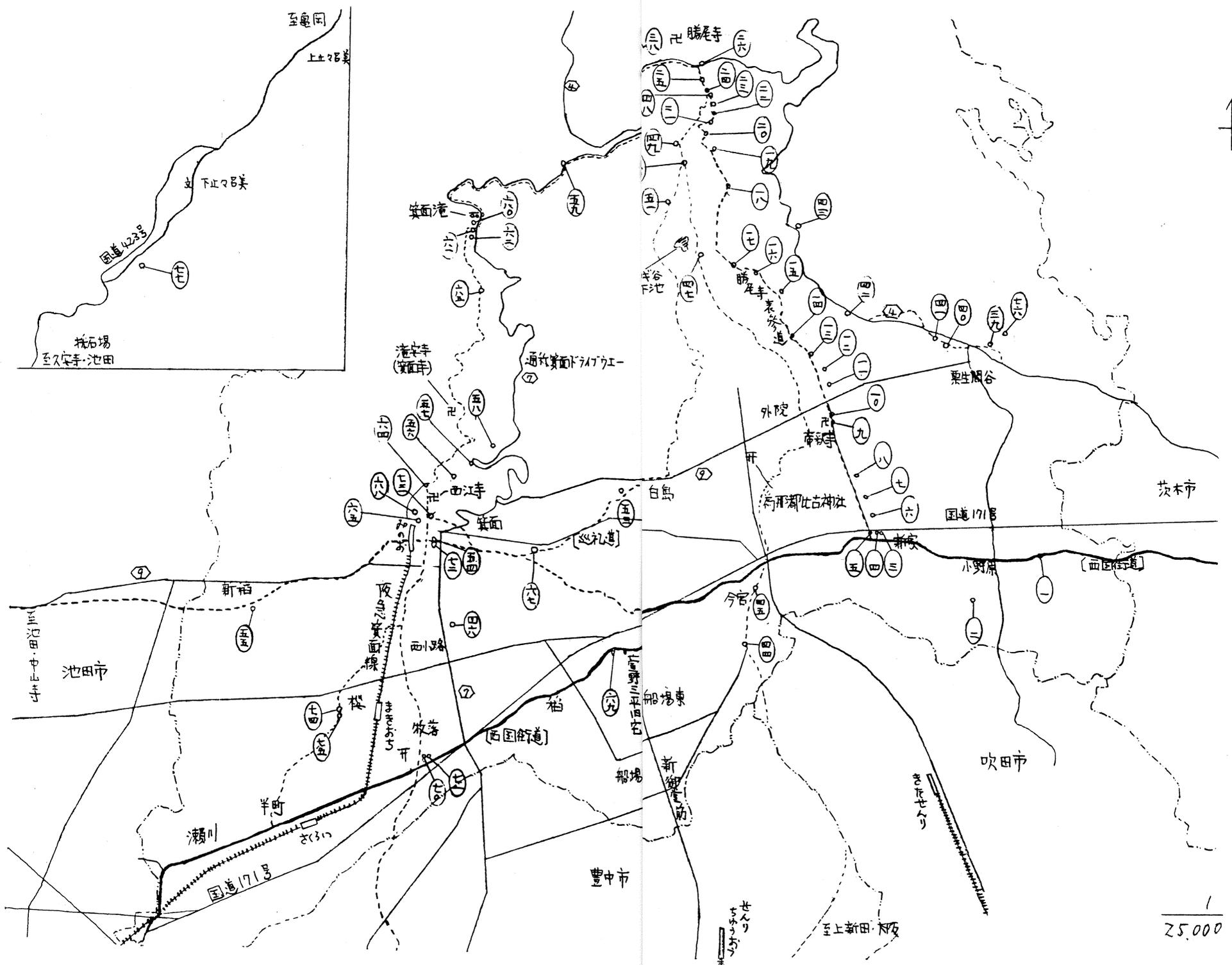
一〇 萱野く箕面道

六六	箕面山への道しるべ	98
六七	京・みのをの道しるべ	100
六八	萱野三平舊跡への道しるべ	101
六九	萱野三平墓の道しるべ	102

一一 牧落く箕面道

105	105
-----	-------	-----

七〇	みのをみちの道しるべ	105
七一	天神道の道しるべ	107
七二	分水石	108
七三	中の坂の道しるべ	110
一二	半町く箕面道	112
七四	箕面参りの道しるべ	113
七五	桜の道しるべ	114
一三	栗生間谷く茨木佐保道	115
七六	佐甫・国見道の道しるべ	116
一四	久安寺く亀岡道	117
七七	池田道の道しるべ	118
一五	その他	119
七八	京道・たんば道の道しるべ	119
七九	池田・勝尾寺への道しるべ	120
八〇	亀岡・ふくすみへの道しるべ	121
八一	大津道の道しるべ	122
資料		123
	勝尾寺参道町石一覽表	122
参考資料		125
あとがき		126



1
25,000

一 西国街道

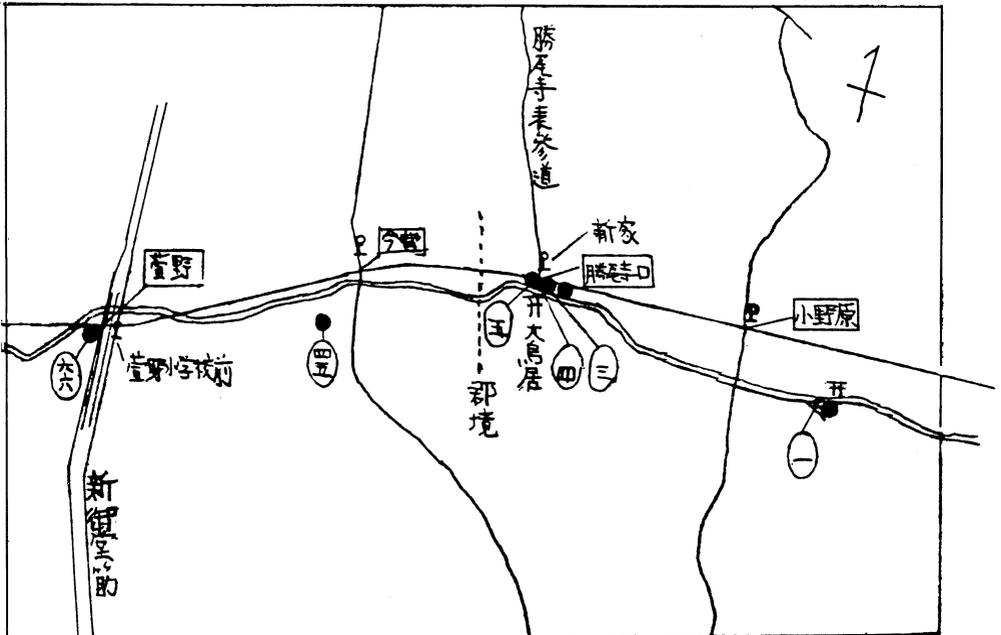
西国街道は古代には山陽道とよばれ、京の羅城門より九州の太宰府に至る大路で、現在箕面市には草野駅ススキノが設けられていた。中世になると瀬川は宿場となり、京と西国を結ぶ近道として賑う重要な道になる。

徳川幕府は街道・宿場を整備したが、その後参勤交代の大名の入京を禁じたので伏見から山崎を通り西へ向うことになった。山崎から西宮までを山崎通りとも呼んでいたが、京・西宮間を通称西国街道という。

小野原には京都・伏見を示す街道の道標がある。街道を西へ向うと粟生新家に、有馬帰りの藤原定家があるかに勝尾寺を拜したと明月記に書いている勝尾寺の大鳥居がある。ここから北は、山門まで三十六町という町石の立つ勝尾寺の表参道である。

この新家と西隣の今宮の間が三嶋郡(旧嶋上・下郡)と豊嶋郡の境になる。今宮にはもと大阪まで四里三十丁の道程を示す道標があった。

萱野には街道が国道一七一号と、新御堂筋線とが交叉する辺りに箕面への道標があった。



西国街道

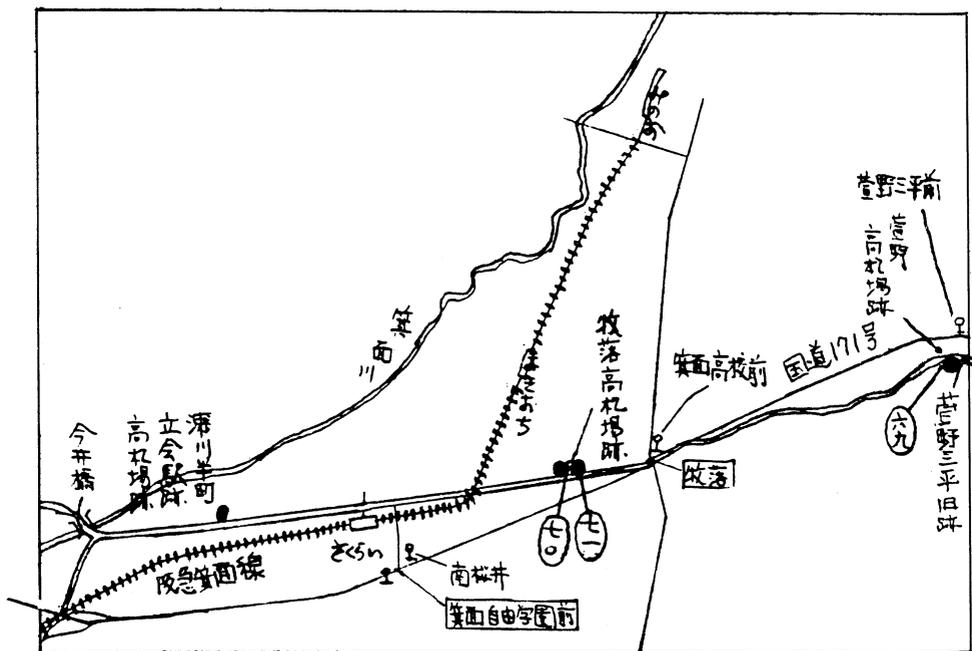
北西に道をとると聖^{ヒツリ}の住所と梁塵秘抄にうたわれ、勝尾寺とともに信仰を集めていた箕面瀧安寺に至る。

又、街道に面して立つ白壁の大きな長屋門は赤穂義士の一人・萱野三平の生家跡である。その邸内に三平辞世の句碑があり、墓はこの南方の共同墓地にある。

牧落の札場跡には、「みのを」と「大阪・はっとり天神」への道標がある。箕面内の西国街道筋には、新家・萱野・牧落・半町瀬川の四ヶ所に高札場跡がある。

瀬川は西の今井橋を渡って宝塚から有馬へ向う有馬街道と、南にたどって昆陽へ向う西国街道との分岐点で、古くから宿駅を営んできたが、いつの頃からか瀬川だけでは本陣が維持できなくなり、瀬川半町立会駅となった。自動車教習所の西隣の廃屋は旧半町本陣の建物である。又、この辺りは、太平記に書かれている元弘三年（一一三三）の赤松勢が六波羅勢を追って西国街道を攻め上る瀬川合戦、建武三年（一一三六）の新田勢が足利勢を西へ敗走させた豊嶋河原合戦の戦場跡だと言われている。

西国街道から北や南に折れる道の角々に道標が立っていたが、既に失われたものも多々ある。



一 京・伏見への道しるべ

現在地 小野原東六丁目七

小野原の東の端に近い三叉路に、享和二年（一八〇二）に建てられた西向き道標がある。京都・伏見への道を案内するものである。西国街道を示す道標は市域ではこれのみで、字も堂々とし彫りも深くて立派である。

弥三八という人がこの地の住人であったのか街道の利用者であったのかはわからないが、信仰厚い願主の旅人の安全を願う心情がうかがわれる。

なお付近に、湊川に出陣する楠木正成がここで水を求めて賞味したと伝えられる井戸がある。現在の小堂の辺りには往時小庵があり、明治初年に廃庵になった後は茶店ができて、名水が愛飲されたということであ

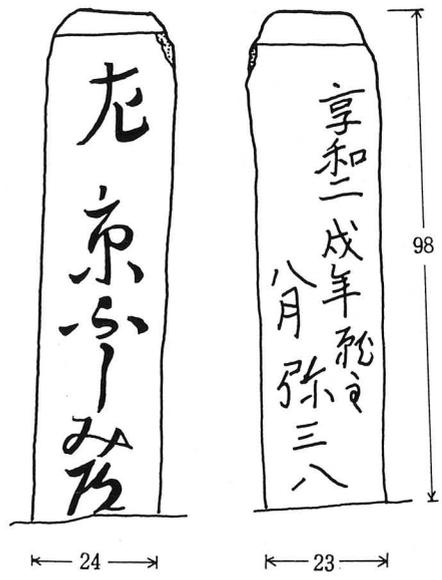




る。
 又、村への疫病や鬼神の侵入阻止を祈願して建てられた常夜燈、道の北側には村社の春日神社の御旅所があるなど、ここは村にとっても重要であったと思われる。

正面

右



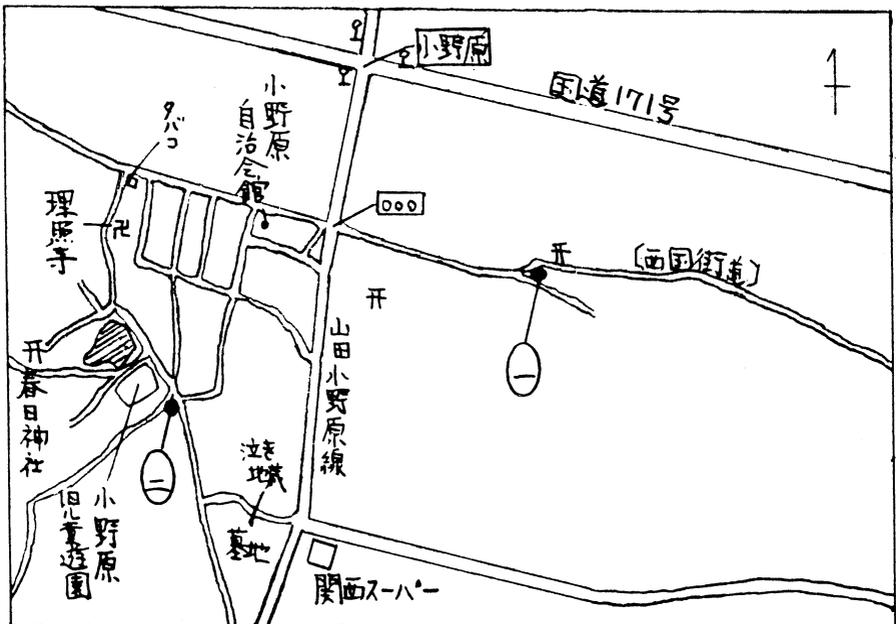
二 小野原～新田・山田道

西国街道の小野原西の常夜燈から七、八〇メートルほど東を南へ折れると、道は理照寺、春日神社の前を通って児童遊園地の南で二又に分かれる。

左手を南にたどると四〇〇メートル余りで吹田市山田に至る。又、右手を行くと豊中市古江台近辺のニュータウンを通り、山田街道の上新田に至る。

山田街道は能勢街道の桜塚辺りから、熊野田、上新田を経て山田に至る旧道で、この道筋には勝尾寺への案内の道標が数基ある。

小野原から南に向う道は近年まではこの道のみで、西国街道の角には道標があったと聞くが今はない。



二 新田・山田の道しるべ

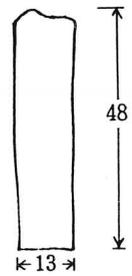
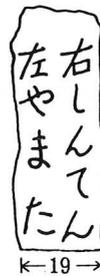
現在地 小野原西六丁目七

小野原春日神社から共同墓地へ向う道が二又に分かれる正面に東向きに立っている。

粗けずりで、新田、山田の方向のみが刻まれている。

夏草が生い茂る頃は、見落してしまうほどの小さな

石柱である。



三 勝尾寺表参道

勝尾寺への参道は幾筋もあるが、西国街道に面して立つ新家の大鳥居からまっすぐ北へ、粟生外院の帝釈寺の横を過ぎ、府道池田・箕面線を横切り山へ入って行く道が表参道である。代表的参道という意味で、特にそういう呼称があるわけではない。箕面市史では旧参道と書いているが、この他に東からも西からも参道があるので、ここでは便宜上、表参道という言葉を使用する。

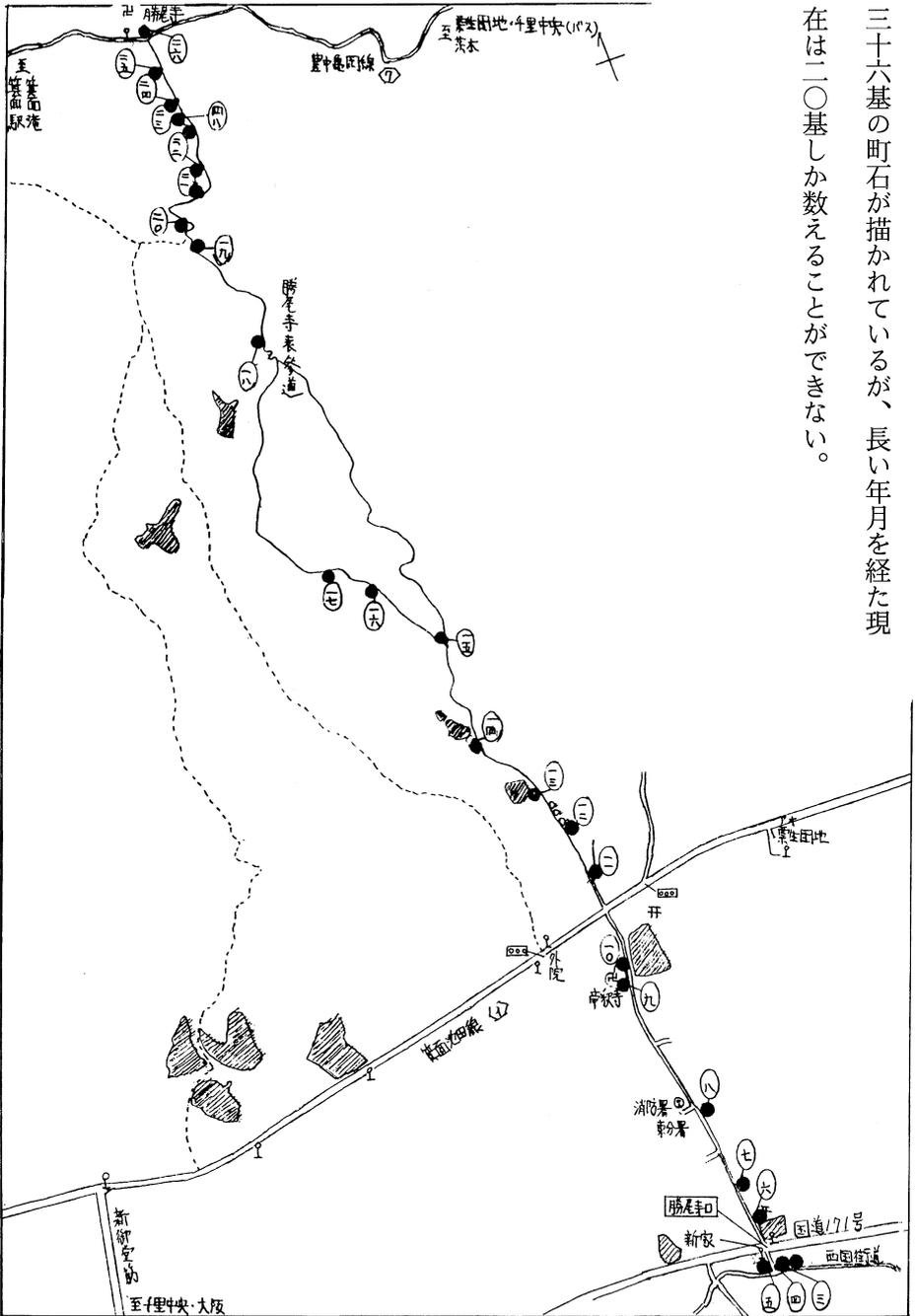
この道は、石の鳥居を基点として山門まで三十六町一里〓四キロの距離であることを、町石が示している。この町石には必ず梵字と町数が刻まれている。梵字は金剛界の種子曼荼羅の各尊を表わしたものである。

町石の下部は摩耗がひどく判読しにくいものもある。

二十二町石から十町石までの道は、現在歩かれている道筋とは違い、少し西へずれた別の道筋であった。その証拠に、そちらには十九町石と十七町石があり、清和天皇が勝尾寺へ行幸された折、行巡上人がここまですて迎えたと伝えられる対面石がある。旧道筋と現道筋が合流した点よりしばらく北へ登った所に十町石があり、現在はドライブウエーとして勝尾寺の門前に至る道祖本・勝尾寺街道をたどる巡礼道は、この十町石付近に合流する。

三町石より山門まで直線の下り坂になるが、眼前の山腹に緑と伽藍の織りなす風景は、観音の慈悲を求めてはるばる山坂道を登って来る巡礼者には極楽浄土に見えたことであろう。寺に残る古絵図には、一町毎に

勝尾寺表参道



三十六基の町石が描かれているが、長い年月を経た現
 在は二〇基しか数えることができない。



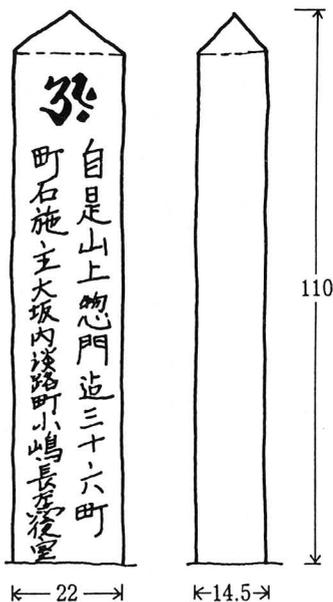
三 寄進標石

所在地 粟生新家一丁目三

石の大鳥居の右脚下にあり、花崗岩製の尖頭角柱で町石と同じ型のものである。これより山上の総門まで三十六町の町石を寄進したのは、大坂内淡路町小嶋長左衛門後室であるということを標記している。

この町石には建立年月日が刻まれていないので、いつ建てられたものか全くわからない。

タラーケ



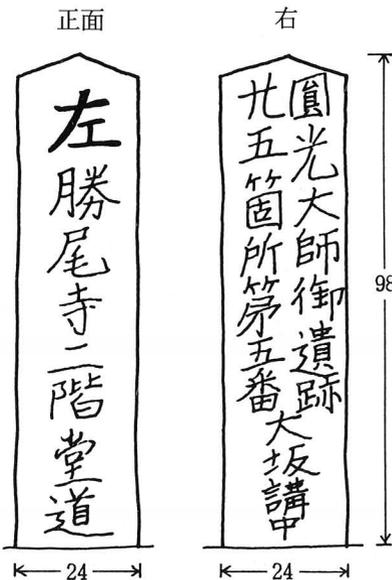
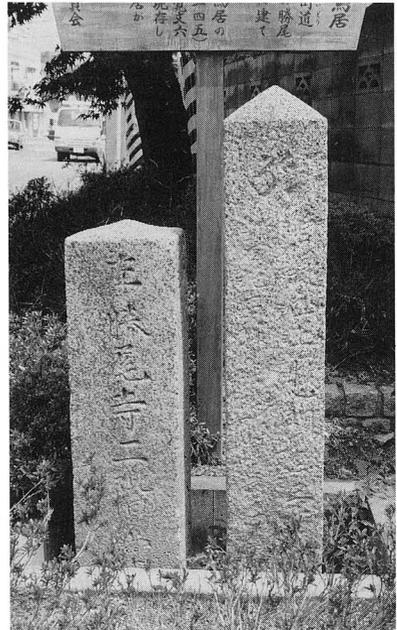
四 二階堂道の道しるべ

現在地 栗生新家一丁目三

寄進標石の隣に並んで立っているが、最近の鳥居の改築にともなって少し位置が移された。

法然上人が四国配流をとかれ京に入るまでの四年間を二階堂に滞在されたので、圓光大師（法然上人）二十五遺跡の第五番として浄土宗信者の霊場とされている。

この標石もいつ建てられたのかはわからないが、摩耗度から見て町石よりも大分新しいと思われる。



五 三十六町石

所在地 粟生新家一丁目二

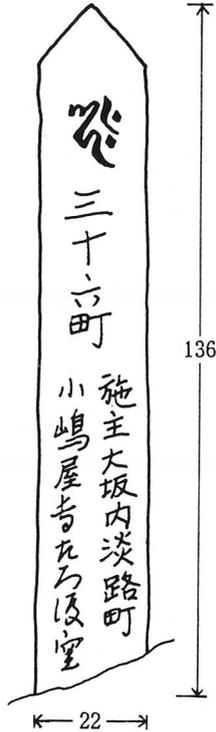
石の大鳥居の左手前に西国街道に面して立っている。

以前は道端にポツンと立っていたが、鳥居の改築にともなって、周囲を整備して保護されている。

長さや形は、先の寄進石とほぼ同じである。

寄進標石には小嶋長左衛門後室とあるが、この町石には小嶋（屋）と屋号が刻んである。

コケ



六 三十五町石

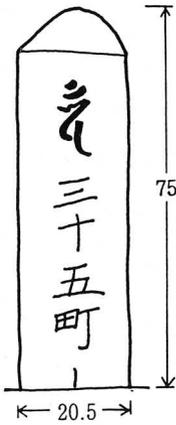
現在地 粟生新家二丁目一

国道一七二号を北へ渡ると右手の春日神社の参道の入口に庚申塚と並んで立っている。

折損した上部だけが置かれてあるといった様子で位置も少し移動されているように思われる。



パン



七 三十四町石

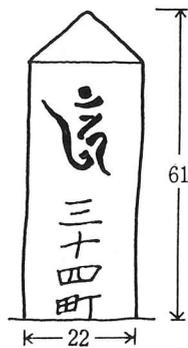
現在地 粟生外院一丁目一六

箕面東コーポラスのフェンスの内側の植
え込みの中に立っている。

三十五町石と同様、折損した頭部のみで
位置も変更されている。



ウー
ン



勝尾寺表参道

八 三十二町石

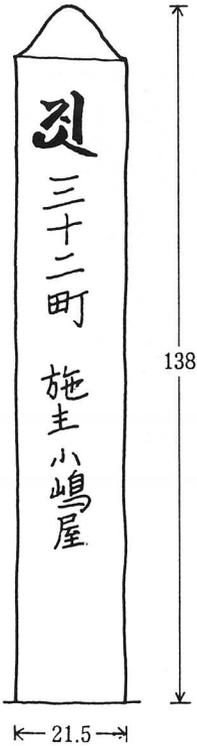
現在地 粟生外院一丁目二〇

消防分署の斜め向いに立っている。もとは、小野原に向う地道の角に立っていたので、位置が南に少し移されている。

施主は小嶋屋とのみ刻まれている。



ア



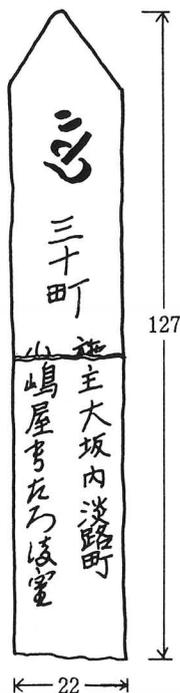
九 三十町石

所在地 栗生外院二丁目一四

もとは帝釈寺の東門の筋向かいに立っていたようだが、道路工事で掘り起こされ、真二つに折れたまま長らく帝釈寺の堀内に放置されていた。住職さんの篤志で、つなぎあわせて境内の一角に建てられた。この町石は、頭部の先頭部が他のものより長い特徴がある。



オン

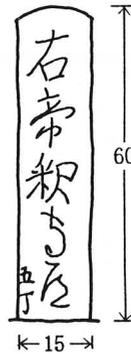


勝尾寺表参道

一〇 帝釈寺の道しるべ

帝釈寺の北側の駐車場の入口に立っている。

近年ここに移されたもので、旧位置がどこかはわからない。表示の方向から、門前の旧道を西南へ行った
どこかかと推測するのみである。



一一 二十六町石

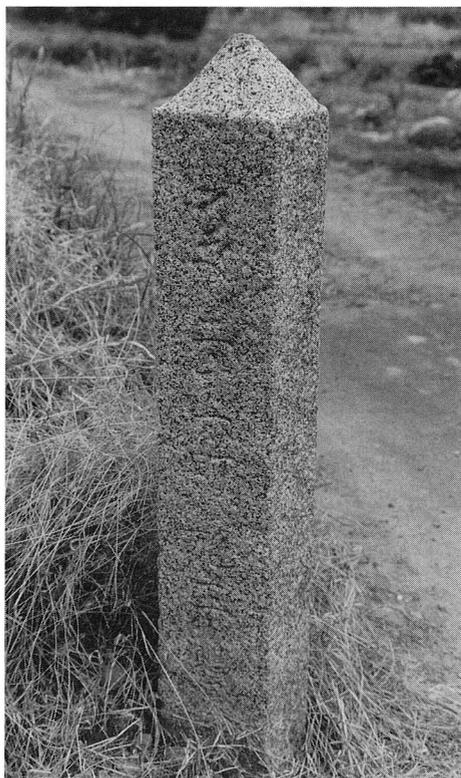
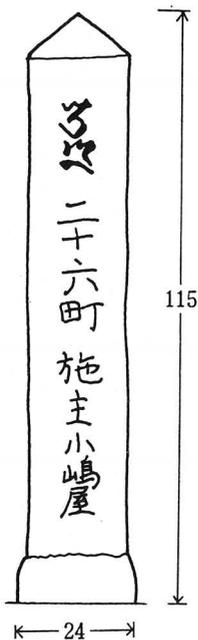
現在地 粟生外院六丁目六

府道箕面・池田線を横断して北へ一〇〇メートルほど入った所、野道が二又に分かれる正面に立っている。

ここは二十八町石がある位置であるが、現在は二十六町石が建ててある。つまり二十六町石の位置に二十八町石があり、どういう訳か入れ替ってしまっている。



タラタ



一三 二十七町石

所在地 粟生外院六丁目九

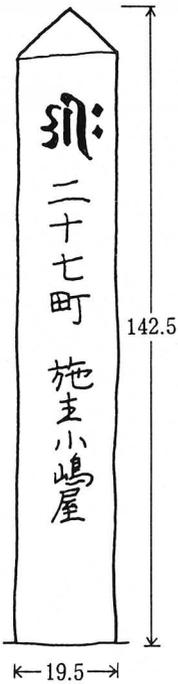
参道の右手に立っている。

三十二、二十八町石と同様にこの町石も

施主は小嶋屋とのみ刻まれている。



ギーク



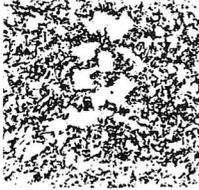
一三 二十八町石

現在地 粟生外院六丁目六

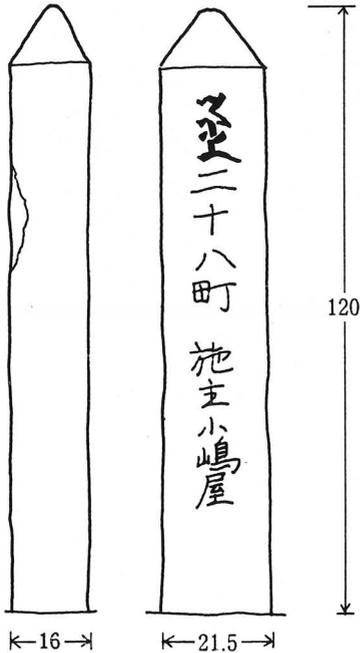
奥上池の土手の下に立っている。

二十六町石と入れ替わっていることは前に説明した通りである。

場所、向き、距離等から考えあわせると、現存する町石で初めに建てられた位置が変更しているものが少なくない。



キリタ



一四 二十三町石

大畑下池の土手の前に立っている。これも位置が相当に変更されているように思われる。



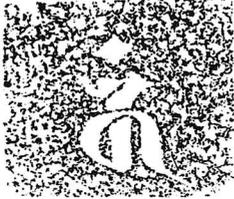
カン



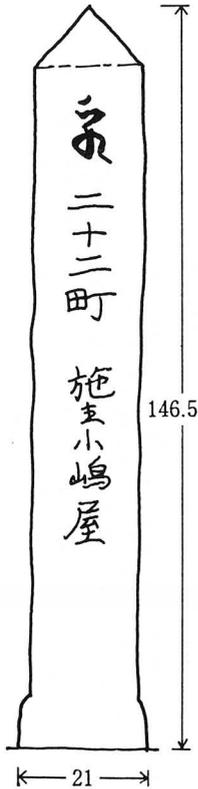
一五 二十二町石

現存する町石の中で一番背が高い。

この道標の辺りは小さな平地になっていて、松が一本目印のように立っていたので一本松前の町石と呼んでいた。現在の参道はここからまっすぐに北へ上っていくが、本来の参道はここから左折、道標の後ろから尾根道を通って十町石の下に出る。

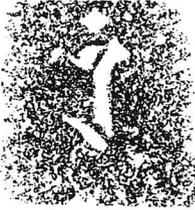


キヤー

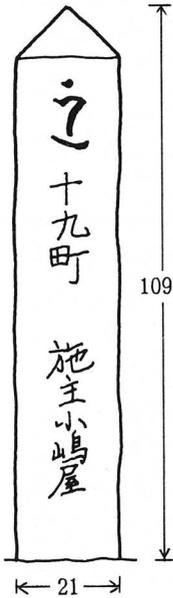


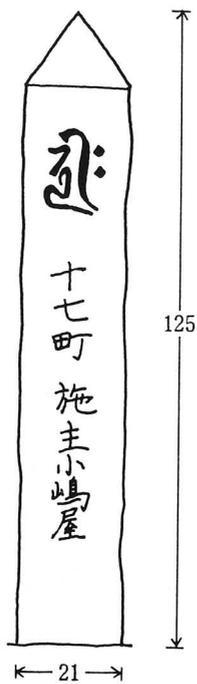
一六 十九町石

二十二町石から左へ廻り林の中を行くと左手に十九町石がある。最近はその土地の人しか通らなくなり、あまり知られていなかったが、今回はつきり確認することが出来た。



ラン





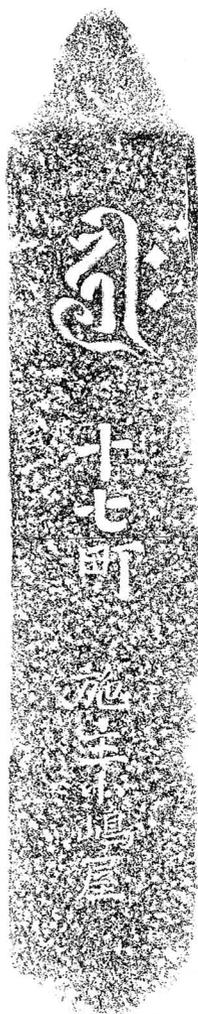
一七 十七町石

一九町石よりまっすぐ北へ山道を行くと、左手にある。すぐ横の木が大きく成長して、それに推されて傾き、かろうじて立っている。





コ
ク

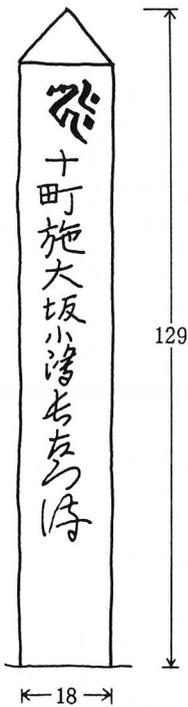


キ
リ
ー
ク

一八 十町石

現在の参道と合してしばらく北へ上ると十町石がある。

小嶋屋寄進の町石はここまでであって、この先は鎌倉時代に建てられた古い町石七基がある。



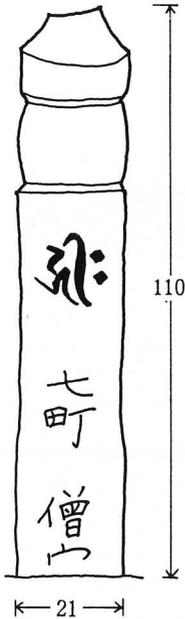
一九 七町石

現在地 粟生勝尾寺山林七一林班る小班

十町石から四〇〇メートルほど上ったところにある。十町石までは、江戸期の小嶋屋寄進のものであったが、これから一町石までの七基と下乗石は鎌倉時代、宝治元年（一二四七）に建てられた五輪塔婆である。種子、町数、願主名が刻まれており我が国最古の町石で国の指定文化財になっている。七町石は頭部の空輪と風輪が欠けている。旧寺域の南限、勝示谷に建てる文書にあるところを見るとこの七町石が一番端であったと思われる。



キリーク



二〇 六町石

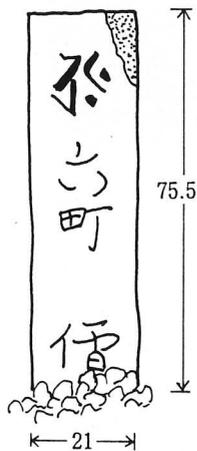
現在地 粟生勝尾寺山林七一林班の小班

上部の空、風、火、水の四輪が欠け、角柱の地輪のみが残っている。

残存状態を見ると、五輪は一石で作ったものでなく別々に作り、積み重ねたものである。



タ
ラ
ー
ク



二一 五町石

現在地 勝尾寺山林七一林班る小班

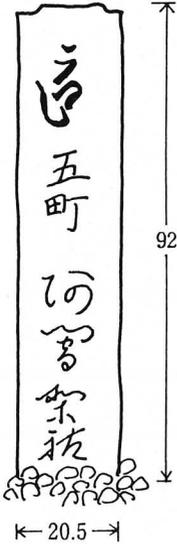
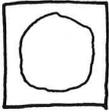
六町石より丘陵を登りつめたところにある。

願主名の阿闍梨というのは、天台、真言宗で、
師範となる高僧とされている。又、祈禱をする
修験者のこともこうよばれることもある。

この町石も空、風、火、水の四輪が欠け、地
輪の角柱のみである。



ウーン



二二 四町石

現在地 勝尾寺山林七一林班の小班

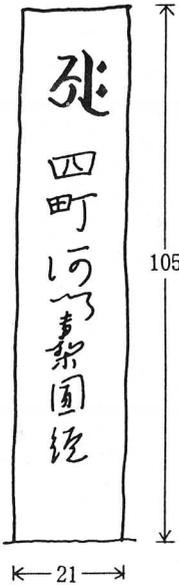
総体に梵字の彫りは深いので良く読み取れるが、願主寄進名は彫りが浅く、字が摩耗していて読み難い。

箕面市史では、圓常としているが圓経のようにも読める。いずれにしても、どういう人物かは解らない。

これも上部四輪が欠け、角柱のみである。



アケ



二三 三町石

現在地 勝尾寺山林七 林班る小班

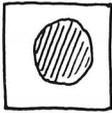
丘陵の稜線をたどっていくと左手に三町石がある。

三町石も、空、風、火、水の四輪が欠けて、地輪の角柱のみ立っている。

願主名は阿闍梨願為と市史にはあるが、願□とも読める。下の字は摩耗がひどく読みにくい。



キリーク



92

21



二四 二町石

現在地 勝尾寺山林七十一林班の小班

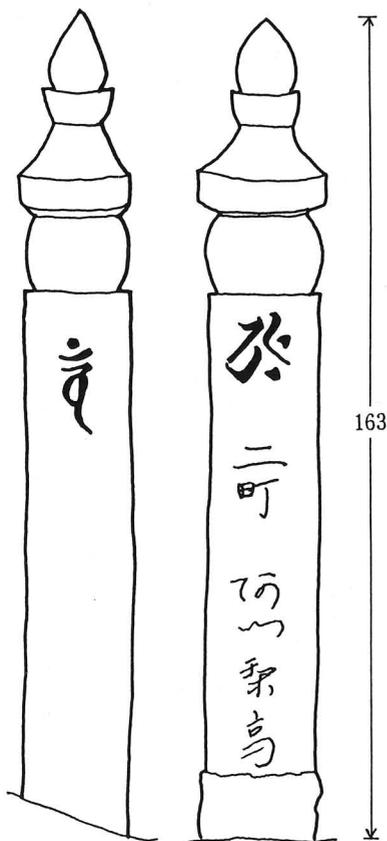
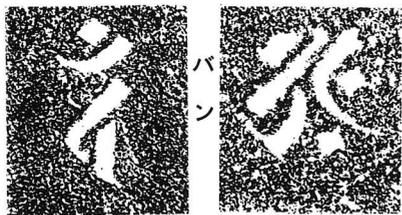
三町石からは、山門に向かって北へ、下り坂になる。途中、帝釈寺、中山寺への道標がある。

二町石と、一町石の二基は、完全な五輪の卒塔婆の形を残している。

梵字は、正面に宝生如来を表わすタラーク、左側にも、大日如来を表わすバンが刻まれている。二面に刻字のあるのは他にない。願主は市史に高像とある。

但し阿闍梨高慶とも読める。

タラーク



← 21 →

左

← 22 →

正面



二五 一町石

現在地 粟生間谷二九一四番地の一

山門まで、あと一町の所にある。

勝尾寺文書に、「宝治元年十一月比（頃）、町率都婆立之、月輪ノ梵字者天王寺人書也。丁数教念房也。其比東西坂一町ツ、人別ニ（下欠）」という記録が残っているのがこの町石の由来である。

建立宝治元年（一二四七）ということとは、文永二年

（一二六五）に建てられた有名な高野山の町石よりも十八年も前に建ち、日本で一番古い町石ということになる。

但し、門前の坂は南北に通っているので「東西坂一町ツ」という文に疑問をもつひともあるが、この町石以外にあてはまる「町卒都婆」は見当たらない。



勝尾寺表参道



ウ
ー
ン



二六 下乗石

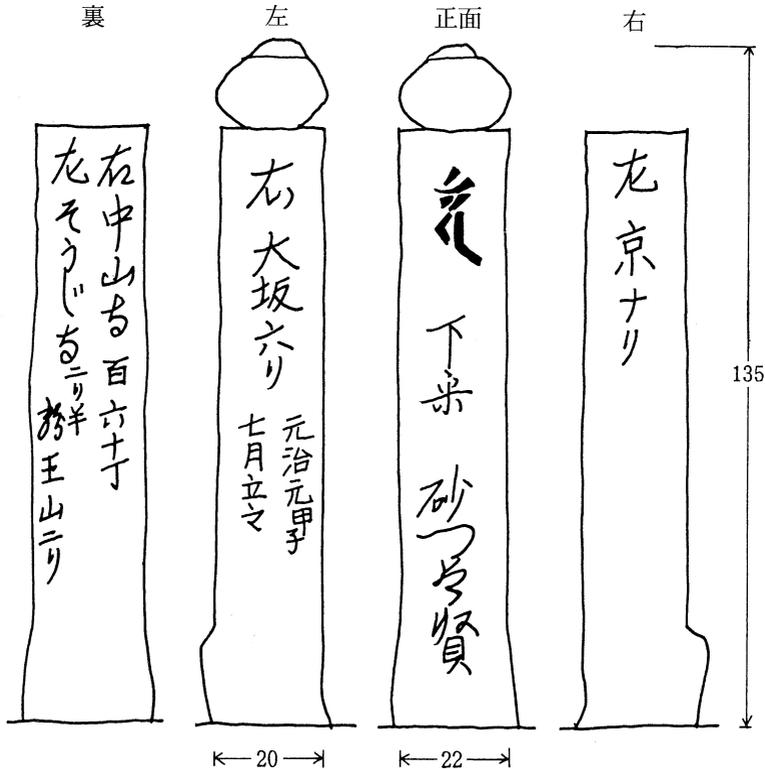
現在地 粟生間谷二九一四の二

山門に向って右、ドライブブウエーに面して立っていた。これも五輪塔婆であったが上部が欠け角柱だけである。

この下乗石に関する記録はないが、すべての様式が五輪町石と同じなので同時に建てられたものと考えられる。砂門慶賢と刻んであるが、僧と同じ意味の沙門のことである。高野山の町石塔婆百七十七町石に沙門慶賢とあるが同一人ではなからうか。

下乗石は道標ではないが、この側面にはそれぞれ道案内の文字が追刻されている。

明治になる四年前に慌ただしい幕末の年に、放置されていた石に新しく文字を刻み、建て直したものと解釈できる。



右中ノ山ノ古ノ道ノ下
 左ノ山ノ古ノ道ノ下
 右ノ山ノ古ノ道ノ下
 左ノ山ノ古ノ道ノ下

右ノ山ノ古ノ道ノ下
 左ノ山ノ古ノ道ノ下
 右ノ山ノ古ノ道ノ下
 左ノ山ノ古ノ道ノ下

右ノ山ノ古ノ道ノ下
 左ノ山ノ古ノ道ノ下
 右ノ山ノ古ノ道ノ下
 左ノ山ノ古ノ道ノ下

バン

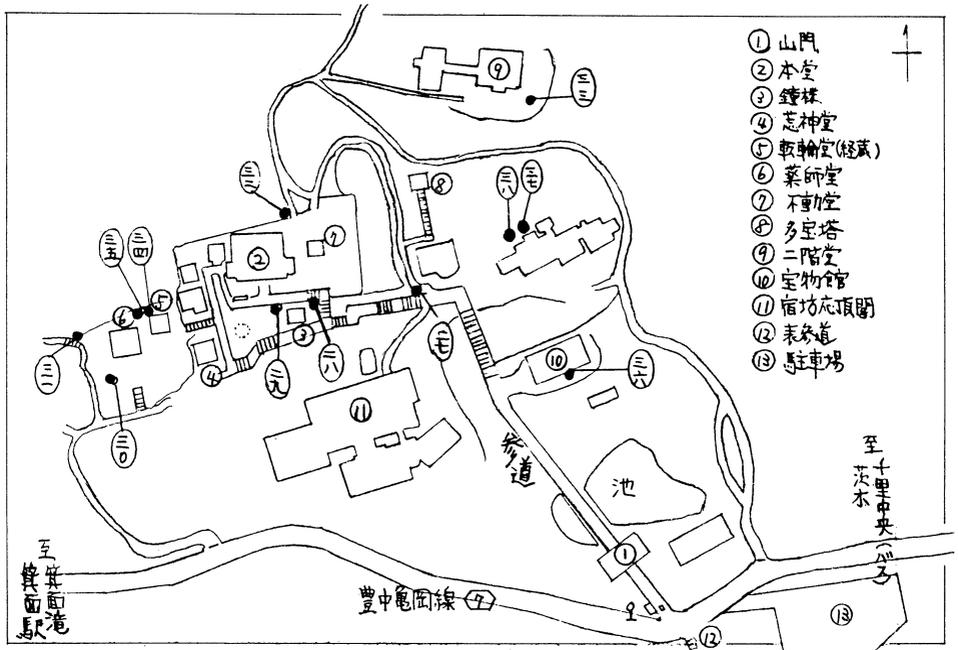
四 勝尾寺境内

粟生間谷二八八五の二

勝尾寺は、神龜四年（七二七）善仲・善算の兄弟が草庵を結んだのがはじまりで、この二師について受戒し開成と名乗った光仁天皇の皇子が大般若經六百巻を書写し、宝龜六年（七七五）に般若台に納めて弥勒寺を建立したと伝えられている。初代座主となった開成は、堂宇・仏像を整え、更に宝龜九年に妙観が造像したという十一面千手観音を安置したと勝尾寺古流記に記されている。

その後第六代座主行巡の時に、清和天皇の病氣平癒に効験を顕わしたので、「勝尾寺」という寺号を賜り栄えたといわれている。しかし寿永三年（一一八四）源平の兵乱の際に一山のほとんどもを焼失したが、源頼朝の命で八年をかけて再建された。

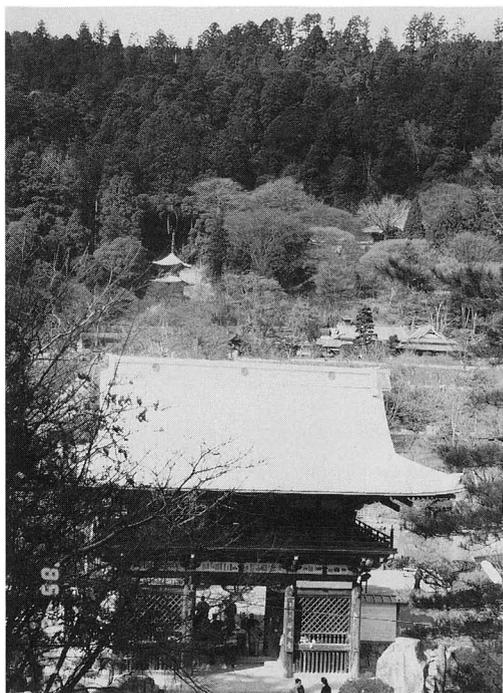
勝尾寺は、本来山林修行の道場であったが、第四代座主証如（七八一〜八六六）は、浄土教の先駆者でもあり、境内に念仏常行堂を建てた。後に法然上人が寓居していた二階堂である。



又、今日まで西国三十三番霊場の二十三番札所として、参拝客で賑っている。

観音信仰は観世音菩薩が三十三の姿に化身して、人々を苦しみや悩みから救うとある法華経にもとづくものである。

近畿地方を中心とする観音霊場巡りは、奈良時代に大和長谷寺の徳道上人が始めたともいい、平安時代に花山法皇によって始められたともいわれるが、室町時代以降に庶民の間に拡がり、江戸時代に入ると誓願の成就・霊験と恩寵の祈願・贖罪などを願って巡礼する人々が多くなった。



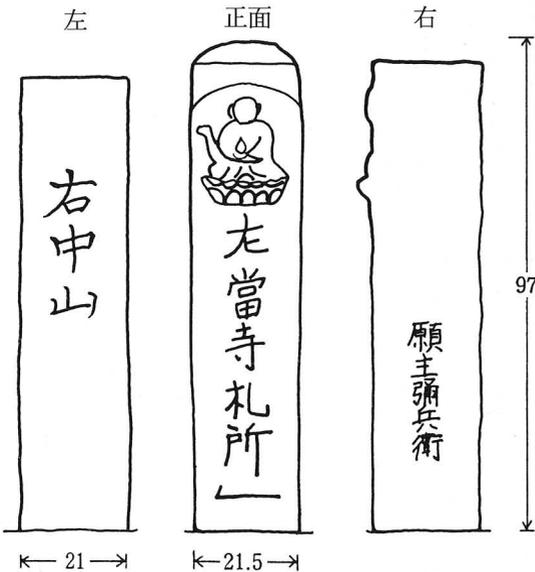
(昭和六〇年撮影)

二七 中山寺への道しるへ

山門からまっすぐ階段を上った正面広場のさつきの植え込みの前に、南向きに一メートル弱の角柱が立っている。

正面上部に蓮華座を表面から約四センチほど半円形に浮彫りにし、その上を円形光背を表わすのか浅く彫りくぼめて高さ一六・五センチの観音座像を半肉彫りにしてある。

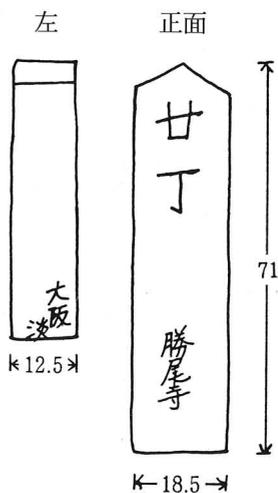
観音の右手首を右に指差し札所の方向を示しているのは珍しい。



二八 廿丁石

本堂への最後の階段の左角に山形の角柱の道標が立っている。

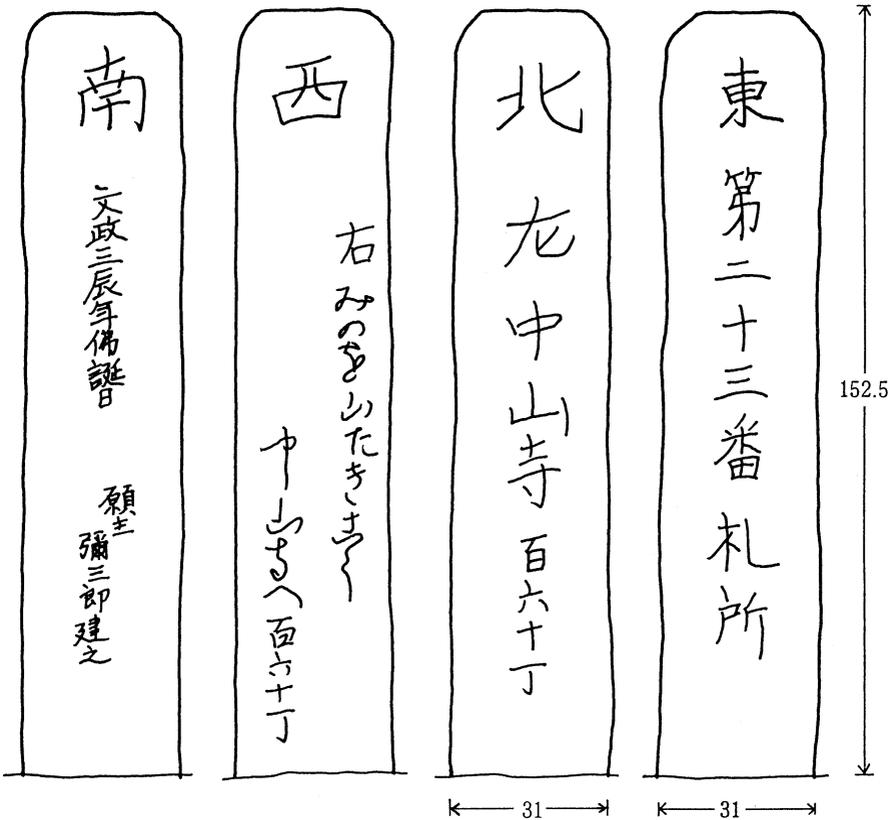
正面に「廿丁 勝尾寺」左側面に「大阪 淡」と彫られ、建立者の名が刻まれているようだが下部は埋め込まれていて判明できず、どこからの丁数か旧位置はまったく不明である。

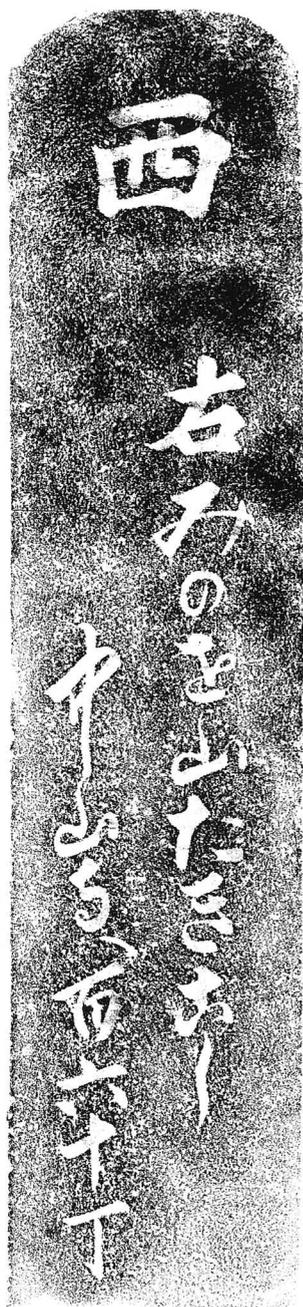


二九 鐘樓横の道しるべ

鐘樓の西横に文政三年（一八二〇）の釈迦誕生日に建てられた道標がある。

政の茶屋から箕面川にそって下り、滝道を通って巡礼道にでる道筋を示している。





三〇 薬師堂前の道しるべ

本堂西側の石段を上ると、右側に開成皇子作と伝えられる薬師如来が祀られていた薬師堂がある。

その前方に天保一四年（一八四三）九月に建立された六字名号碑がある。

東面の名号の右側には「みのふたきこし中山寺」と方向を示す手が刻まれている。以前は境内から巡礼道につながる小路がいくつもあり自由に往来できた。又、

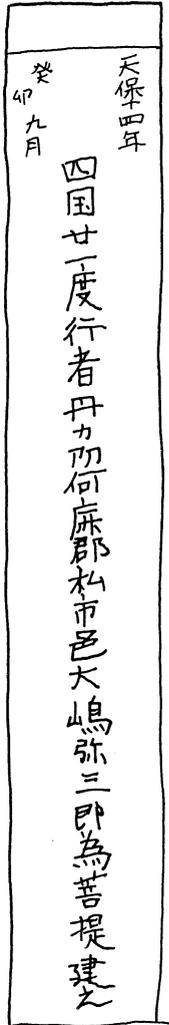
名号の左側に祐瑞の名と花押が刻まれているが、その横の「年二十三」は他と趣を異にする。

同面の「観山照音居士為菩提」と南面の「弥三郎為菩提」とは関連があるのだろうか。丹州何鹿郡私市邑タンシニウカイカルガ大嶋は現綾部市西部と福知山市東部にまたがる地域で、キヤイチムラどちらにも私市、大嶋の地名が現存する。

なお、二九の鐘楼前の道標にも建立者として弥三郎の名が見える。

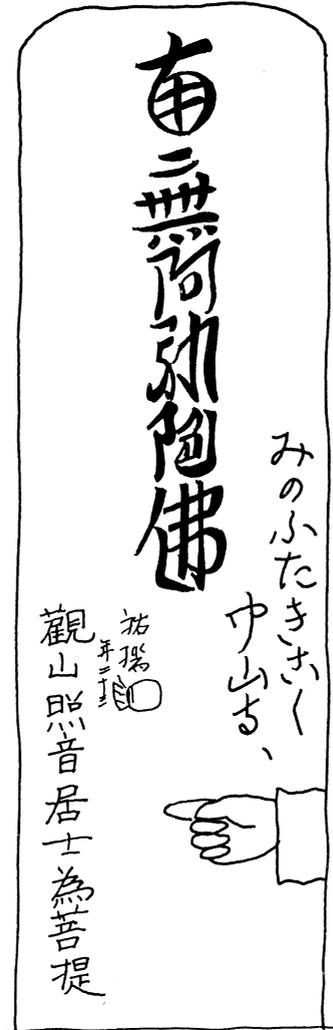


左



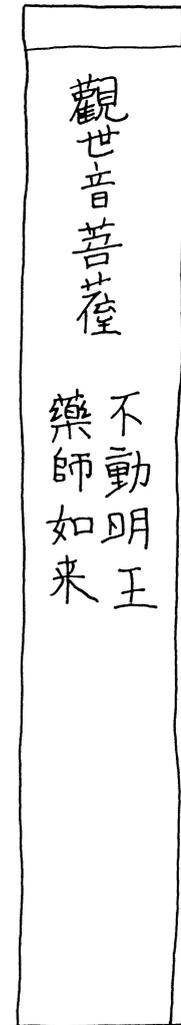
← 31 →

正面

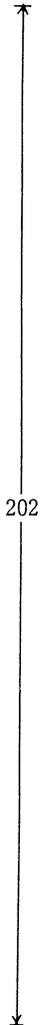


← 60 →

右



← 31 →



三一 奥の院への道しるべ

薬師堂の西側階段の右側に道標があり、東面上部に一四・三センチの観音座像を蓮華座上に半肉彫りにし奥の院へは半丁上ると案内している。

奥の院は開成皇子が大般若経六〇〇巻を書写し、これを納めたという六角型の般若堂である。

又、道標横の石積みの上に源頼朝塔と伝えられている層塔、梶原塔と伝えられる宝篋印塔（永享三年銘）があり、奥の院前の石段下に熊谷直実塔といわれている鎌倉時代の五輪塔がある。

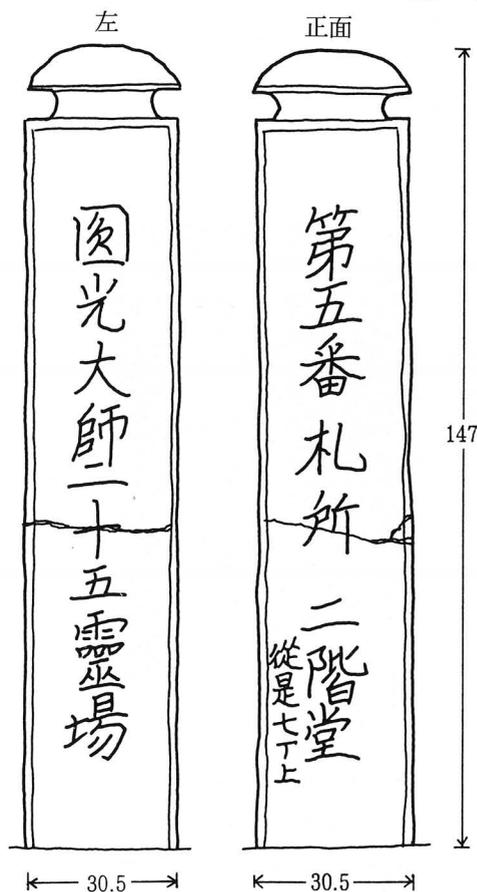


三三二 二階堂の道しるべ

不動堂の横に二階堂への大きな道標がある。二階堂は、勝尾寺に於ける浄土教の確立者である第四代証如上人の草庵であった。

浄土宗の開祖法然上人（圓光大師）が流罪を許されて都へ帰るまでの足かけ四年間この堂に籠ったので、

後世の浄土宗の信徒は法然の徳を慕い、御遺跡として第五番札所二階堂と名付け、浄土欣求の道場と考えたのである。



三三 妙見山道の道しるべ

二階堂の東前に文政二年（一八一九）建立の能勢妙見山への道標が立っている。

山越えで妙見に参詣して中山寺へと巡礼した人達もいたのだろうか。

北面と東面に妙見道開通に関する「新妙見道之誌」が刻まれている。二階堂の前を通り東北へ、高山を経て妙見へ向う新道が開設されて、通行や運搬に大変な利便をもたらしたことがうかがえる。

新妙見道之誌

蓋岡路者跣跣猶病矣况重擔而過乎從頂峰到于高山之古跣最峻岨也 某氏者披叢新作平坦之道焉是無他及仁心於牛馬之勞也噫誰不好斯舉哉乃人人誌之千載之下云尔

文政二年_{己卯}九月 某甲樹之



文政二年七月九日
某甲掛

すくね見山道

三四 歓喜天道の道しるべ

葉師堂の東隣の転輪蔵裏に二基の道標が置いてある。

その一基は大正十四年に噺家が建立したものである

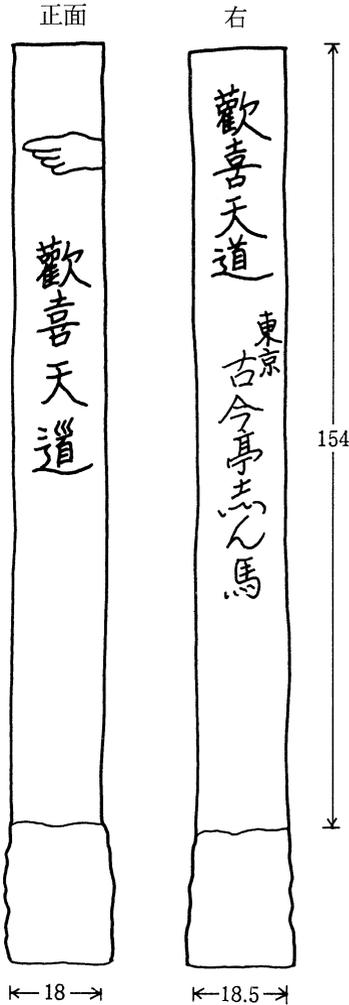
が、旧位置は不明である。

勝尾寺の小島貫主によると、江戸中期に歓喜天信仰

に造詣の深かった以空上人が、開成皇子の墓所のある

最勝ヶ峰の南麓（勝尾寺境内の西）の滝谷に大聖歓喜

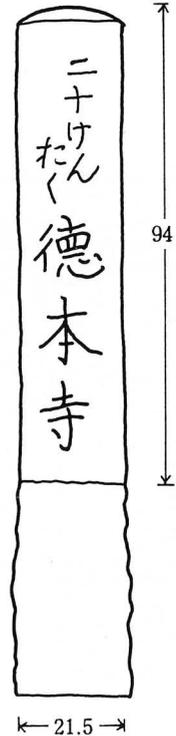
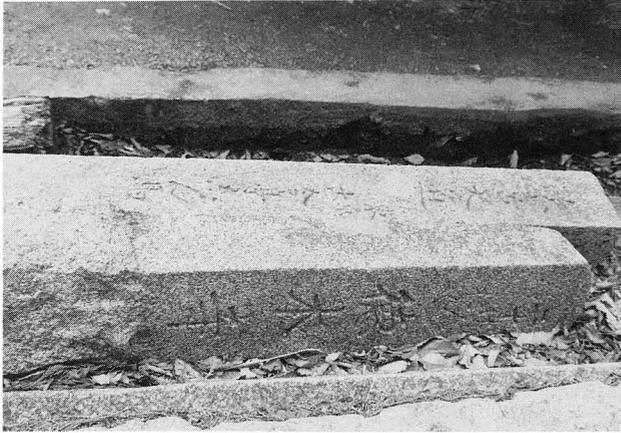
天をまつっていたとのことである。



三五 徳本寺の道しるべ

歎喜天道の道標と並んで徳本寺への道標が置いてある。「二十けんおく」と刻まれているが、旧位置は不明である。

徳本上人は江戸後期の浄土宗の代表的念仏行者で勝尾寺松林庵に滞在して修行・布教したと伝えられている。上人独特の書体による六字名号碑が各地に残っている。



三六 光明院谷への道しるべ

山門の移築工事のため現在（一九九一・四）は宝物館の横に保管されているが、もとは山門の外、西側に立っていた。

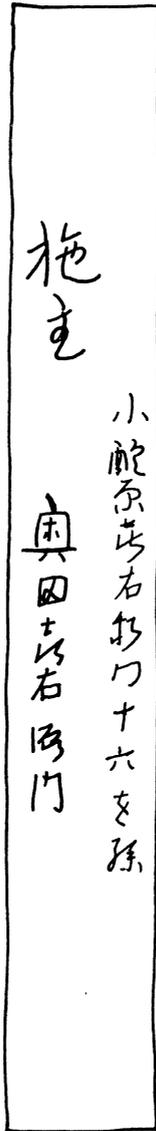
門の前の道を東へ、左折して遊園地へ向う途中の左手の小高いところに光明天皇七七忌七重塔が立っている。

光明天皇は足利尊氏に擁立された北朝第二代の天皇で激動の時代に在位十二年、勝尾寺で崩御されたとも伝えられている。光明院谷の七重の塔はある時期には御陵といわれていたが、京東伏見の大光明寺に光明院陵があるのでこの塔は四九日供養塔であるとされている。



左

正面



← 28.5 →



← 28.5 →

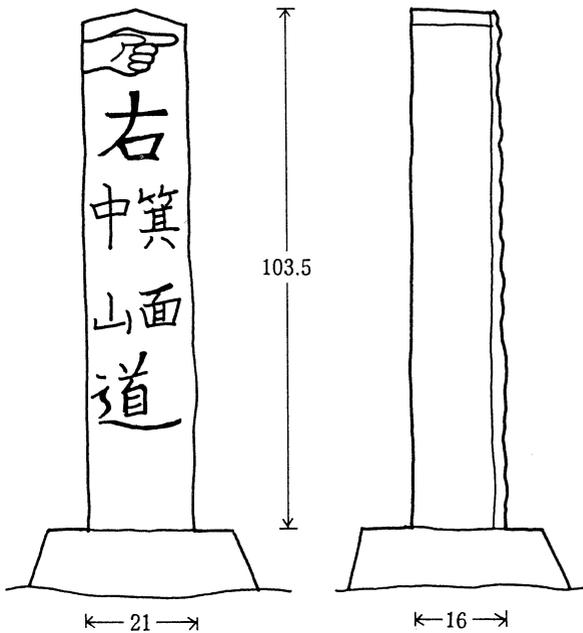
↑ 223 ↓

三七 箕面・中山への道しるべ

山門から階段を上っていくと、正面広場の右手に老朽化した旧本坊の土塀が見える。江戸末期に勝尾寺内にあった二十三院の一つ、小池院シヨウキチインで、他が廃絶してしまっただ後、本坊となっていた。

解体が始まった（一九九二年夏現在）建物の裏手の積み重なった石柱の中に、二基の道標を見つけることができた。

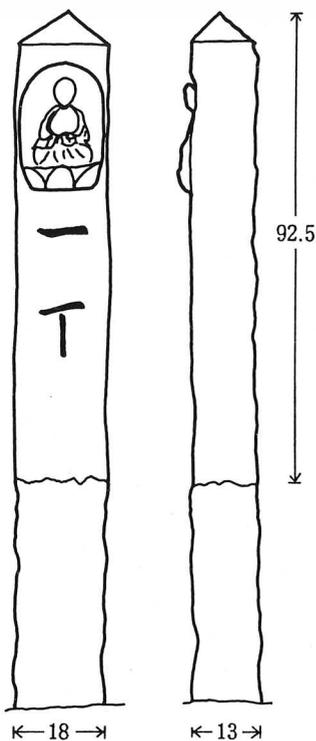
力強い字が刻まれているこの道標は、勝尾寺案内の写真でおなじみのもので、古くは旧本坊の土塀を背に立っていたらしい。



三八 一丁石

旧本坊裏手に(三七)の道標と並んで保存されていた。

上部に舟型の光背がきれいな弧を描いて深く彫りくぼめられ、地藏菩薩が浮き彫りにされている。一丁と刻まれており、境内に保存してあるので、旧位置は寺の付近にあったものと思われるが、全くわからない。



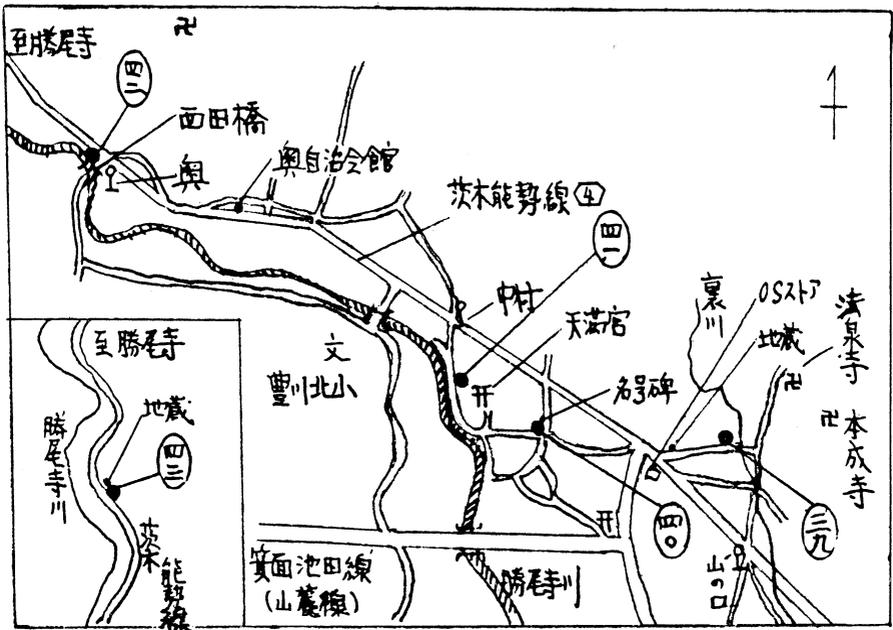
五 粟生間谷く勝尾寺道

府道茨木能勢線の山の口バス停からまっすぐ北へ向うと勝尾寺川の支流である裏川にかかる橋の西詰めに
出る。

この道は大阪府誌に勝尾寺街道と記されている巡礼道である。西国二十一番総持寺より道祖本街道をたどって箕面市粟生間谷の川合集落に入る。ここから勝尾寺川・裏川ぞいに上るとこの山の口に至る。

橋の畔を左に折れると数基の石塔・石仏が並べて祀つてある中に勝尾寺の道標がある。地蔵の祠・人形浄瑠璃竹本直大夫の墓等が建てられている細い旧道はまもなく府道に行き当る。勝尾寺へは交差点を渡り中村天満宮にそって北へ、楠神社・奥自治会館の北側を西へ向って再び府道に出会う所が西田橋で、ここからは勝尾寺川にそって上り、ドライブウエーに祀られる樺の地蔵付近から山中に入り険しい山道を登って表参道の十町石付近に合流する。

現在は舗装された府道が通り、旧道は草深く埋れてその面影は消え失せてしまった。府道にポツンと立つ丁石と地蔵は谷川ぞいの旧参道にあったものであろうと思われる。



栗生間谷～勝尾寺道

三九 山の口の道しるべ

所在地 栗生間谷東五丁目四

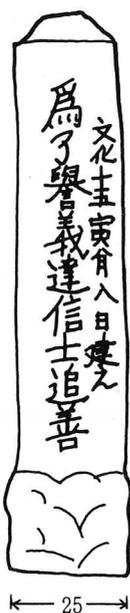
橋の西詰めにあった水車小屋は、地域の共同精米所となつて昔の名残りをとどめているが、その隣に庚申塔や石仏が十一基並んで立っている。河川改修の際に集められたもので、この端に立つ道標は、遙か遠い筑前博多から六十六部として回国していた人が、亡き人の追善供養のため文化十五年（一八一八）観音菩薩に祈願して建立したものである。

六十六部とは法華経を书写して日本六十六ヶ国を遍歴し、その霊場に一部ずつ納めて歩く行脚僧のことである。

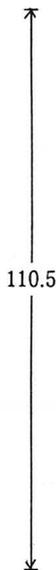
正面



左



裏

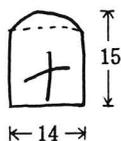


四〇 名号碑前の町石

所在地 栗生間谷東五丁目四

山の口の交叉点より中村の天満宮へ向う途中に高さ二メートル余の南無阿弥陀仏の名号碑が立っており、その基部に道路舗装面からわずかに角柱の頭部がのぞいている。

十の字だけが読みとれるが、二字目からは埋没していて不明。町数を示していると思われるが、これに続く町石は付近に見当たらない。

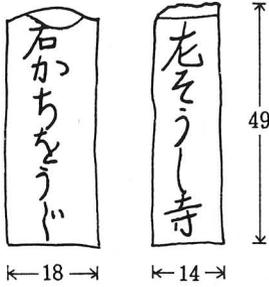


四一 中村天満宮の道しるべ

現在地 粟生間谷西三丁目二三

天満宮境内の北西の隅に上部を欠いた小さな角柱の道標がある。西国二十二番総持寺から二十三番勝尾寺への巡礼道を示している。

南面に「右かちをうじ」とあるので現位置では不適當であり、もとは天満宮南の三叉路の北西の角に現南面を東向きに、右側面の「左そうじ寺」を北向きにして立っていたものと思われる。



四二 西田橋畔の道しるべ

現在地 粟生間谷西五丁目一三

西田橋の東詰めに高さ一九〇センチほどの角柱の道標が立っている。

現在は南面に「すぐそをぢ」と刻まれているが、方向があっていない。もとは府道を東へ横切った旧道の北角に現南面を西に向け、現東面の「勝尾寺是ヨリ廿二丁」を南に向けて建てられていたと推測できる。年号はかすかに大正と読み取れ、九年に建立されている。

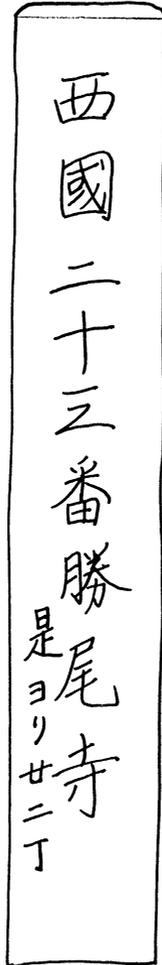


左



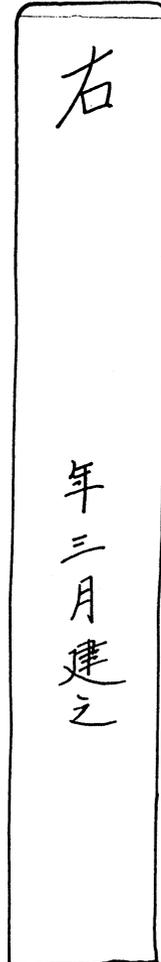
← 29.5 →

正面

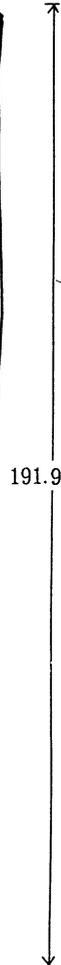


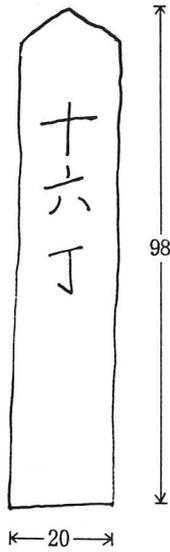
← 29 →

右



← 29.5 →





四三 十六丁石

旧勝尾寺街道は現在の府道茨木能勢線の西側を流れる勝尾寺川にそって山中に入り、この丁石の辺りから川を西側に渡って山を登って行ったもので、地元の話では道標のようなものが何基かあったとのことである。この丁石もその中の一基と思われる。

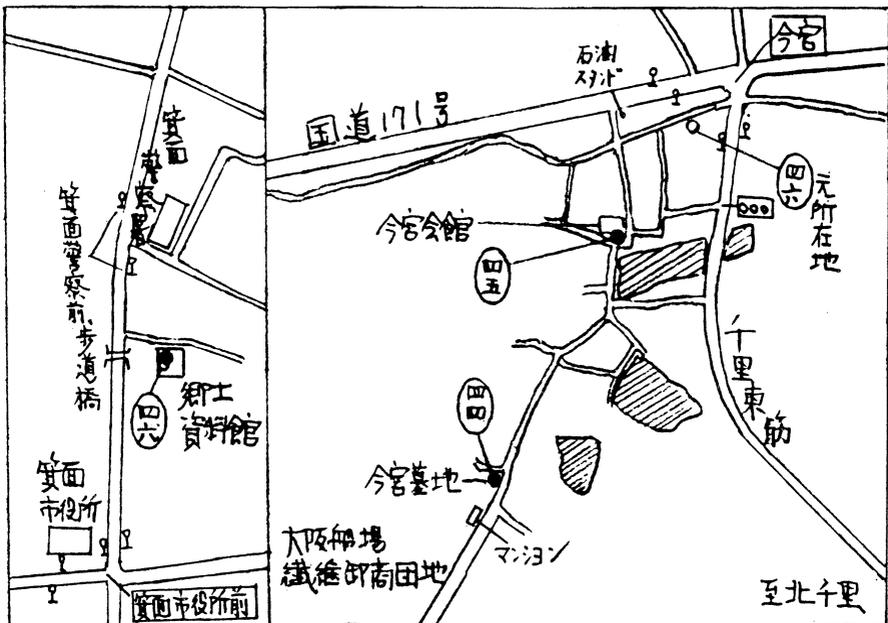


六 今宮～勝尾寺道

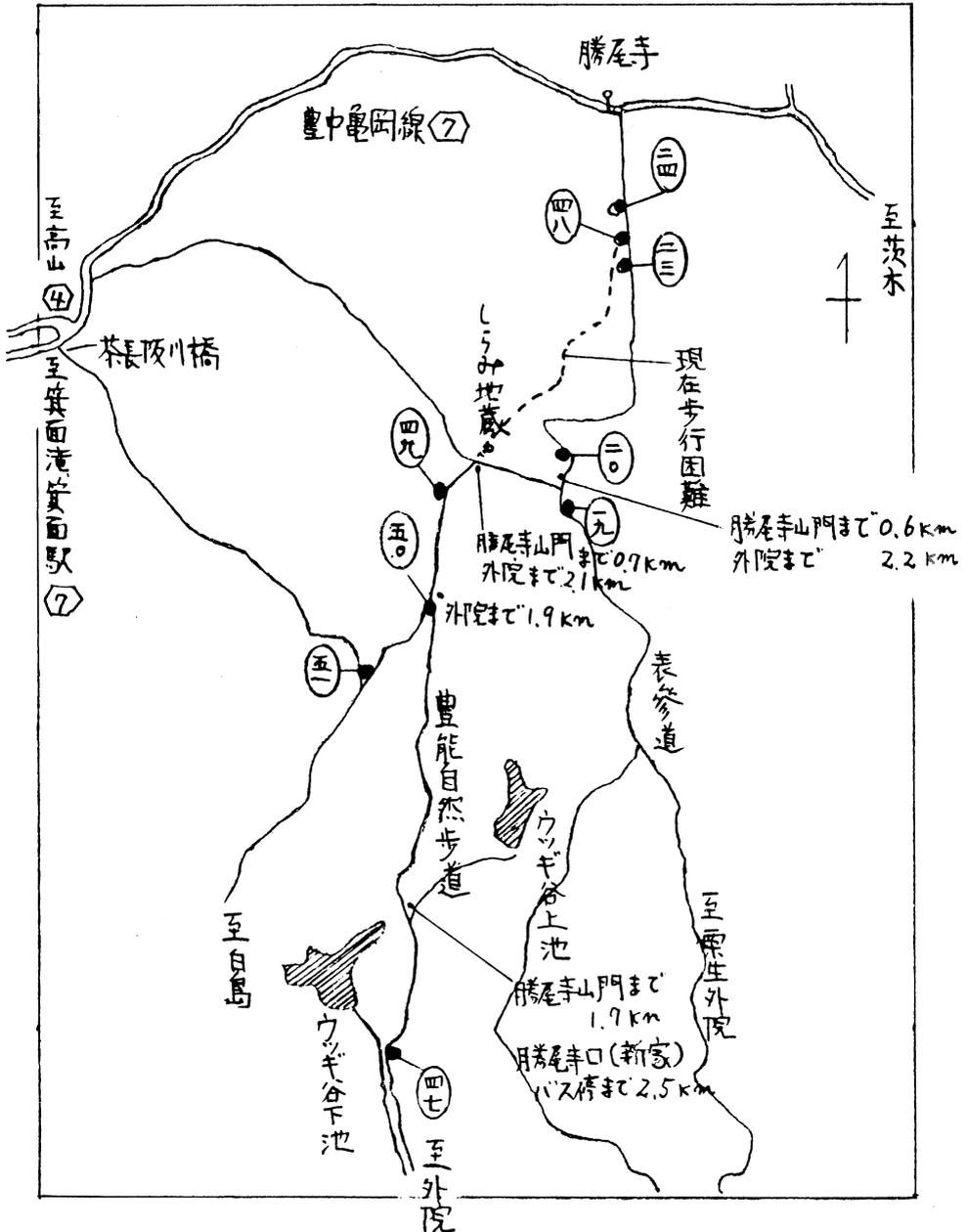
大坂から神崎川を舟で渡り、上新田、今宮を経て山
中を勝尾寺へ向うこのコースは、大坂・勝尾寺の最短
距離である。

途中の千里丘陵は以前は丘や小山が累々と続きその
優雅な景色を寝山と云ったが、千里ニュータウン造成
によってすっかり様相が変わってしまった。わずかに
昔の面影を残す上新田に勝尾寺を示す道標四基が残っ
ている。

今宮から北へは西国街道、国道一七一号を渡り、石
丸の為那都比古神社の南側を東へ折れ、尺下池を廻っ
て北へ、外院三丁目の青松園の東の道をたどって山道
に入っていく。外院谷道の途中ウツギ谷下池(奥の池)
の東を通って谷道を登っていくと道標(五〇)(四九)
があり、更に木立の中でシラミ地蔵とよばれる大きな
石仏に出会う。急勾配の山道をたどると表参道の二町
石と三町石の間に合流するが、今はこの山道は確かめ
にくい。



今宮～勝尾寺道



四四 今宮墓地の道しるべ

現在地 西宿三丁目一六

今宮墓地の北東の隅に南向きに立っている。

上部には宝珠を両手で持つ妙幢地藏菩薩座像を浮き彫りにし、下部は勝尾寺と池田の方向を示している。

墓地周辺も住宅街となり景色が変わってしまった。現在わずかに残っている竹藪も、近々、豊中・小野原間の自動車道路の開通により、その姿を消すことであろう。この道標は墓地内にあるのでその難を免れることと思われる。





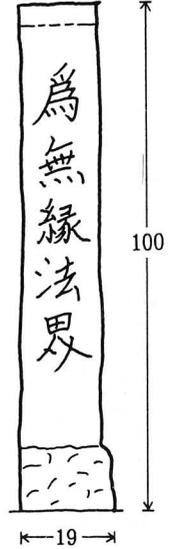
左



正面



右



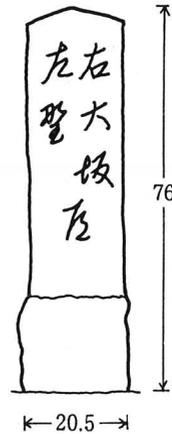
四五 今宮会館の道しるべ

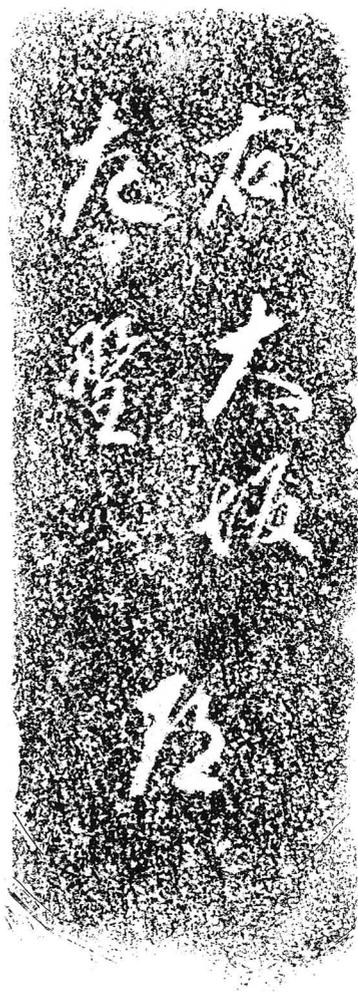
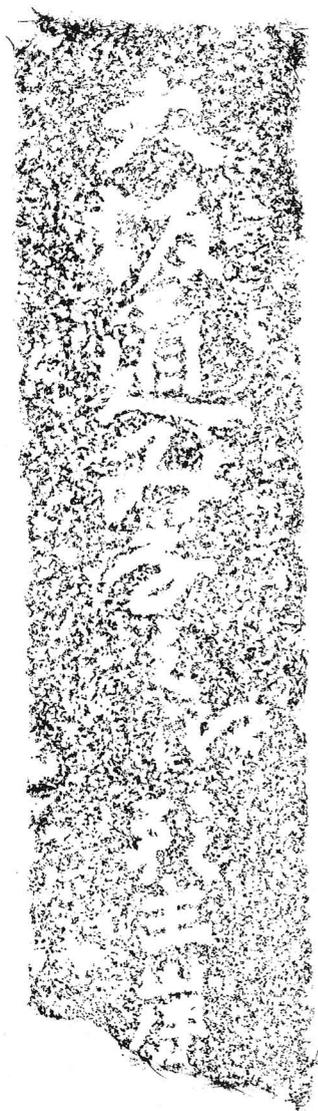
現在地 今宮二丁目七

今宮会館横の植え込みの中に立っている。

もとは会館の前にある沼田池の南、新田を経て大阪へ向う旧道の三叉路の辺りにあったと思われるが、道路整備の際に現在地に移したものである。文字の彫りは浅いが、整った書体で保存状態も良い。

粟生間谷の本成寺裏にある道標が「山道」を示しているのと同じように、「野道」を示しているのは、いかに昔の周囲の状況がしのばれる。





(次頁四六)

四六 阿弥陀名号の道しるべ

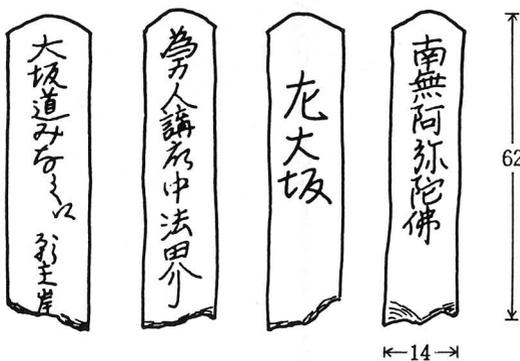
所在地 西小路三丁目一〇

もとは今宮二丁目四の西国街道にあったものである。久しく側溝に埋められていたが、道路修理の際に掘りあげられたのを偶然に見つけ資料館に保存しているものである。

残念なことに途中で折れて文字が最後まで読み取れないが、「左大坂」と刻んである面が東に向いていたのと思われる。小さいものであるが、六字の名号以下四面共に字が刻まれている。



旧位置には大きなもちの木の本の根元に青面金剛の石塔と石燈籠があり、道標に示してある通りに南へ行くと、細い道は蛇行しながら、(四三)(四二)の道標を見つけることができる。



四七 ウツギ谷下池の町石

ウツギ谷下池（奥の池）東ぞいの道端の右手に、西向きに立つ五〇センチほどの町石がある。

道標上部には種子「シクアン」が陰刻されていて、下部に十三町とあるのはここから勝尾寺までの道程と考えられる。





四八 中山・大坂・帝釈寺への道しるべ

現在地 粟生勝尾寺山林七一林班の小班

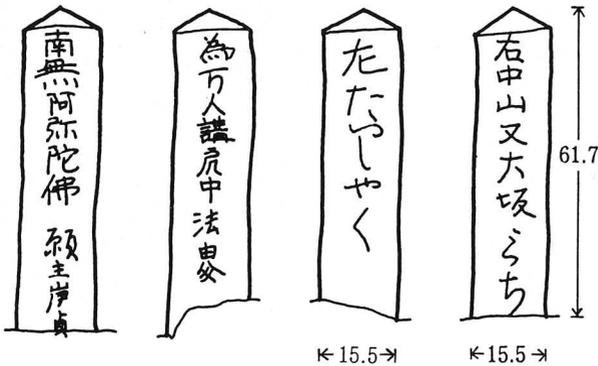
勝尾寺表参道の二町石と三町石の間にある。

この道標の右側から裏側へまわると藪の中をわずかに開いて山道が西の方へのび、さらに谷を下って行く
と木立の中に大きな、しかも傷だらけの地蔵が見える。
土地の人はシラミ地蔵と呼んでいる。

ここから右へ行くと外院谷下り口の三叉路にある
(五〇)の「右中山」「左大坂」の道標につながり、ウ

ツギ谷下池方面から今宮へ、あるいは白島へでる道筋
を案内している。

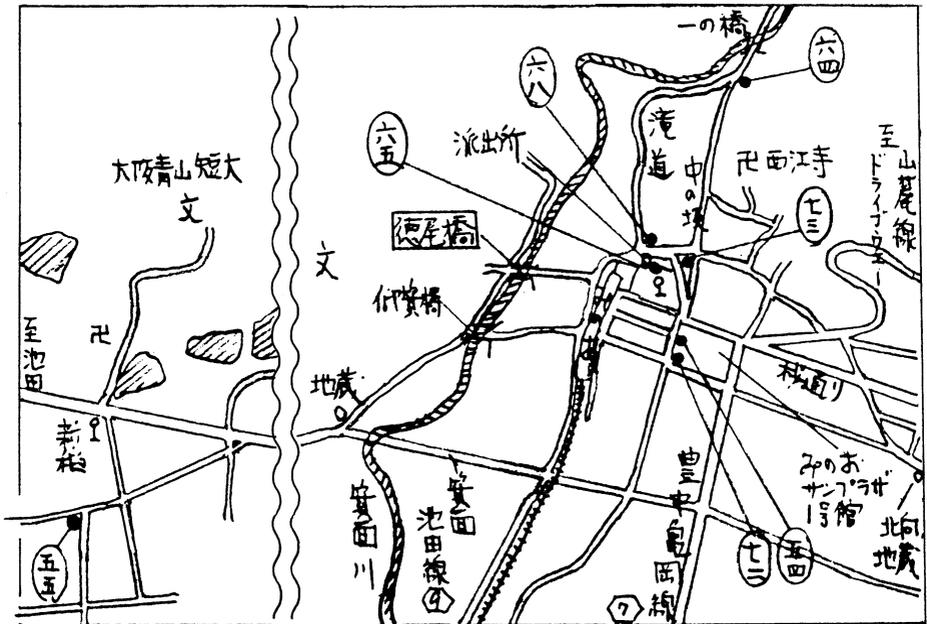
左の道は表参道で、七町石を経て帝釈寺へ至ることを示している。六字名号の下部に刻まれている願主の名は現在資料館に保存されている(四六)の道標と同じである。



内に水神の小さな祠がある。通称白姫神社といい、最近は大阪の粋筋の信者が多くなり、仲々の賑いである。道は池と池の間を通り唐子川を渡ると山中の巡礼道もやっと人里近くなる。老人ホームの南を通る府道箕面・池田線と合し西へ向うと宝珠院の東側を北から南へ横断する旧道がある。北の山側に大宮寺があり、その奥に古くから信仰を集める医王岩（薬師岩）とよばれている巨岩がある。

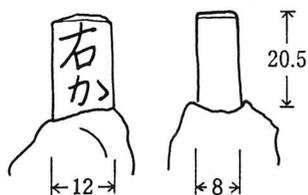
南へ折れると巡礼道の道標があり中山まで三里と案内がある。如意谷、平尾と西へ向い、北向き地蔵の前を過ぎると箕面の中心街に入る。サンプラザの西南角に以前立っていた分水石と並んで中山まで二里半という道標があった。現在は阪急電車のホームで道は分断されてしまったが、巡礼道はまっすぐ西へのびる。

箕面川にかかる仰箕橋を渡って徳尾の巡礼地蔵の前を通り、新稲の旧村に入ると愛宕堂の前の側溝に中山へ二里という道標があり、道は畑（池田）へと続く。



四九 勝尾寺への道しるべ

表参道六町石から七町石への途中を右に折れて三〇
メートル程西南へ下って行った所にあるこの道標、
注意しないと見過ごしそうだが、道の西側に石の頭部
だけが見え、下部は石にはさんでセメントで固められ
ている。「右か」とだけ読めるが、右へ行くと勝尾寺
ということを示しているものと思われる。

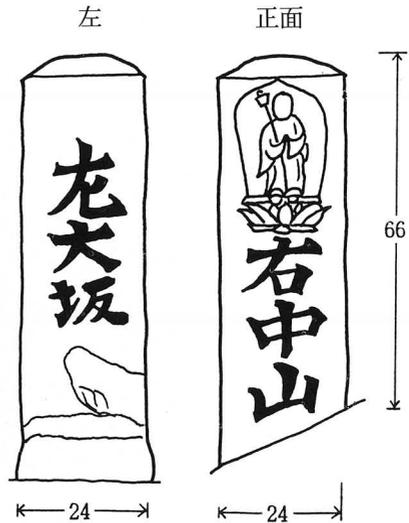


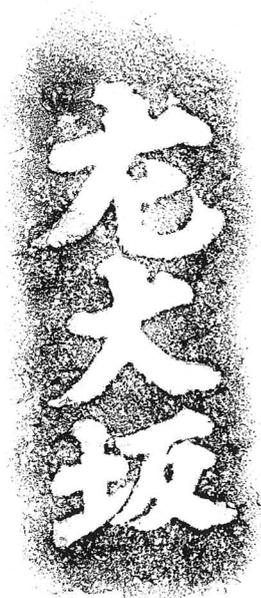
五〇 外院谷下り口の道しるべ

外院谷下り口の三叉路に北向きに立っている。

「左大坂」は急勾配の外院谷を下り、ウツギ下池を経て外院へ、「右中山」は西へ一〇〇メートル程で道標があるが、ここから尾根道を白島方面へ向って下り中山寺へ向う巡礼道を示している。

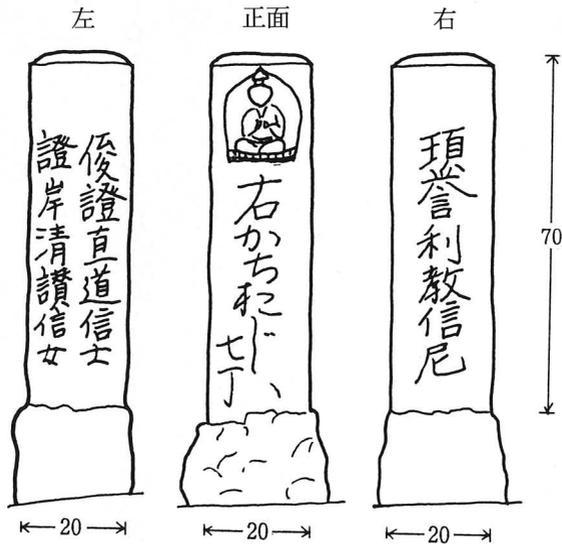
錫杖を持った地藏菩薩立像が浮き彫りにされ、力強い彫りの字に、険しい山中道の安全を祈る心が読みとれるようである。





五一 政の茶屋、白島への三叉路の道しるべ

この道標の南面に「右かちをじへ七丁」と刻まれているのは白島方面から上って来た人に勝尾寺への道程を示したものである。左へ折れると山間の林道で、谷筋をたどって、政の茶屋く勝尾寺の中間あたりに出る。馬頭観音菩薩像が浮き彫りにされているこの道標は、尼になった人が近親者の供養のために建てたものであるか。



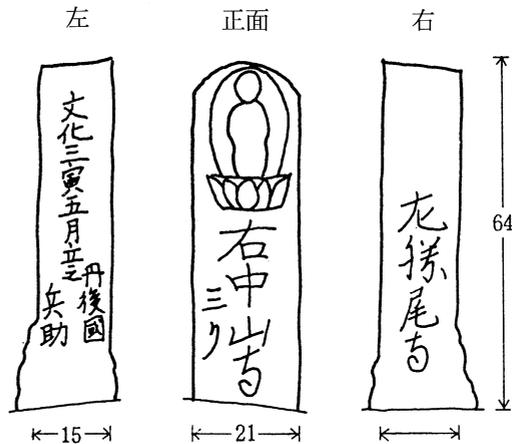
五二 白島の道しるべ

現在地 坊島五丁目一

この道標は白島の医王岩や大宮寺の南、府道箕面・池田線を横切って旧道に入り右折する三叉路の、坊島と白島の境にポツンと立っている。

上部に縦二〇センチほどの船型光背を彫りくぼめた中に観音立像が浮き彫りにしてある。文化三年（一八六三）丹後の国の兵助という人の寄進であるが、西面の「左勝尾寺」の勝尾寺が現名称の漢字で刻まれている。

又、北面の「右中山寺」の下の「三リ」は他の字と異って彫りが浅く線も弱々しく、後に彫り加えられたものと思われる。箕面市内で、建立時がはっきりしている数少ない道標の一つである。





正面

左



右

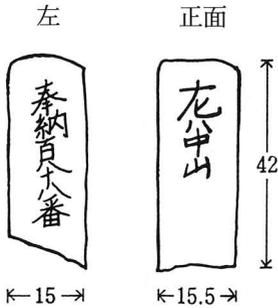


五三 如意谷の道しるべ

現在地 如意谷二丁目五

太春寺の南を通る狭い旧道の土手に寄り添うように小さな道標が立っている。

南面に「左ハ中山」と彫られてあり、先の白島の道しるべから平尾・新稲を通過して中山寺へ向う巡礼道であることがわかる。

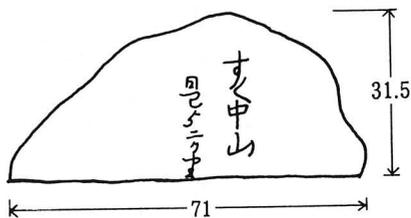


五四 サンプラザ入口の道しるべ

現在地 箕面六丁目三

この自然石の道標は、もとはここから数メートル南の用水の分岐点にあった分水石と共に、昭和五二年、市街地再開発ビル建設のとき、サンプラザ西入口に移された。

箕面川から引いた流れは中の坂から南へ下り、この建物の南西の角で牧落と東の芦原池へと分かれ、その流れの真ん中に建てられていたので分水石（七二）とよばれている。この牧の荘四至の標石と並んで巡礼道の道標があり、まっすぐ歩いて二里半で中山寺に行けることを案内している。



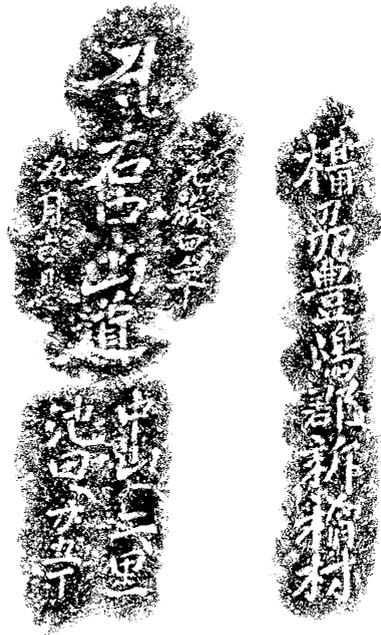
五五 新稲の道しるべ

現在地 新稲五丁目七

巡礼道を村の中ほどまで行くと、左側の民家の塀にそって巡る溝の角に自然石の道しるべが、東向きに立っている。正面の梵字「**礼サ**」は、観音菩薩を表わし、「右中山道 中山へ二里 池田へ十五丁」と刻まれていて西国二十四番中山寺へ向う霊場巡りの道であることを示している。

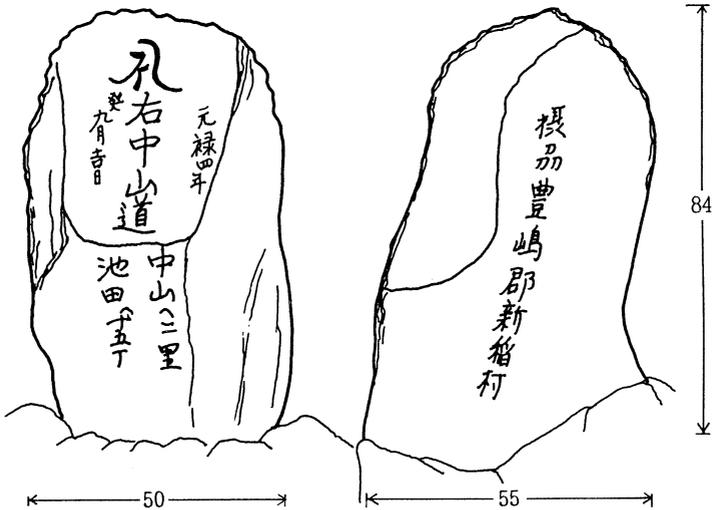
巡礼の旅の安全を願って新稲の村人が「元禄四年九月吉日」に建てたものである。





正面

右



八 高山道

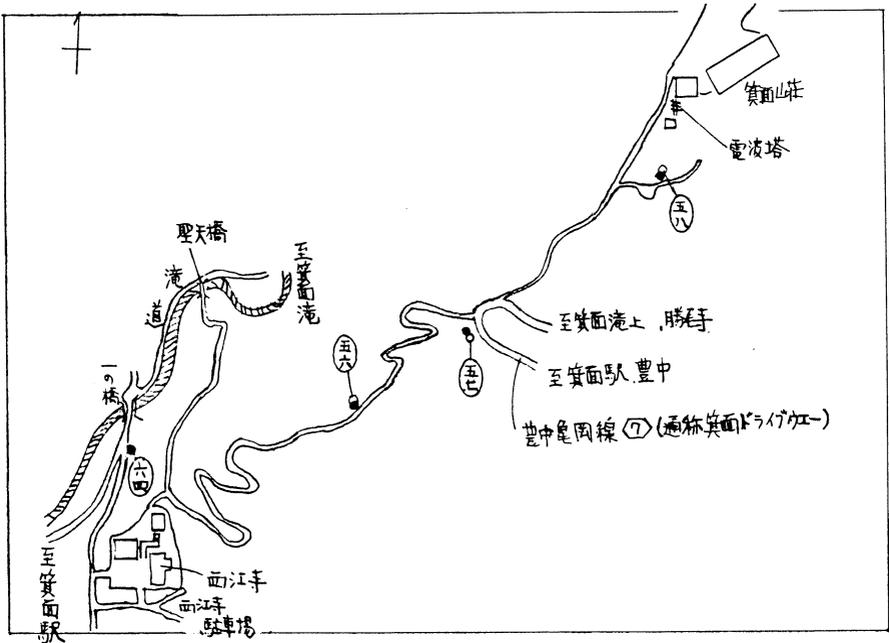
中の坂を上った所に西江寺がある。寺の駐車場にかつて一丁石の道標があった。土地の産物を積んで下つて来た高山の人達は、今もここに枝を張る桜の木に牛をつないで、平尾の村へ売りに出たという。

通称高山道は、中の坂から西江寺の裏山を通り、政の坂を経て、高山の集落に至る道である。今は行方のわからない一丁石に「是より峠道」と刻まれていたそうだが、ここからは急勾配の山道である。

政の坂より先はダム建設で道は途絶え、新しいドライブウエーで迂回するようになった。

又、政の茶屋近辺の道標の指示通り、川に沿って上っていくと勝尾寺に到着するので、途中までは勝尾寺の参詣道でもある。従って丁石が、高山への道標であるのか、勝尾寺への道標であるのかは、現状では判断し兼ねる。

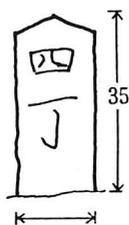
高山は、キリシタン大名高山右近ゆかりの地である。



五六 四丁石

現在地 箕面二丁目

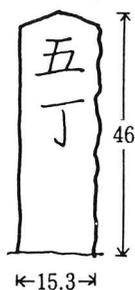
西光寺の裏山を上り、右に住宅街が望まれる尾根道の左側に「四丁」とだけ刻まれた小さな丁石がある。



五七 五丁石

現在地 箕面二丁目

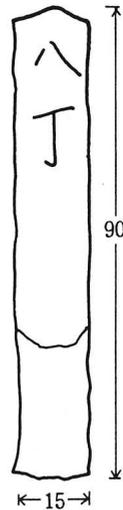
四丁石からさらに上り、ドライブウエーの手前の道の左側、木の根に埋もれるようにして「五丁」と刻まれた同じような丁石がある。



高山道

五八 八丁石

ドライブウエーを横切り箕面山荘の方へ上る山道から少し右へ入ったところに「八丁」の細長い丁石が建ててある。この脇道は一〇メートルほど先で行止りになっているから、この丁石はもとからここにあったものとは考えられない。

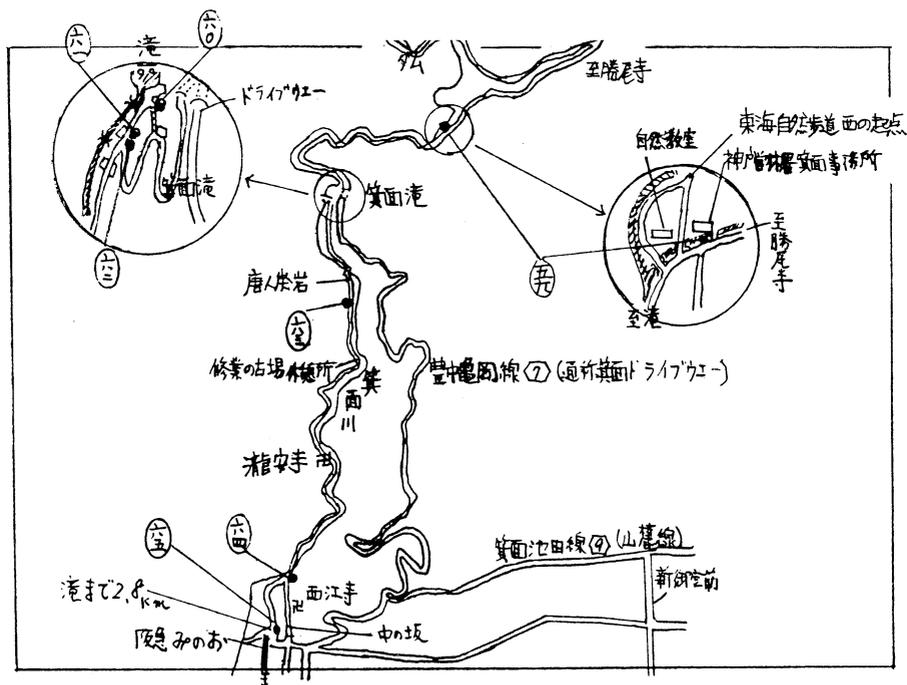


九 勝尾寺く箕面道

勝尾寺境内に「滝ごし中山寺」という案内の道標がある。勝尾寺より箕面川にそって滝に至り、瀧安寺に詣でて中山寺へ向う道で、今はドライブウエーが走り、車で参詣できるようになった。

現在営林署のある辺りは、敷地内に勝尾寺領の傍示石蔵があり、ダム建設で中断してしまった高山道との分岐点である。昔、恋のもつれで殺された高山村の娘を憐れんで、いつとはなしに村人が政の坂とよぶようになったこの付近には、川岸に馬頭観音像を刻んだ道標があるが、その向いに政の茶屋とよばれ、旅人に親しまれた茶店があった。美しい山々、溪谷を縫って下っていくと大滝のしぶきの音が聞える。

滝道に下り箕の形をしているとも云う滝を賞で、踵をかえして谷川にそった道を南に下る。新緑、紅葉と清流の折りなす景観、恐ろしいほどの巨岩などを観賞しながら聖の住所と歌われた瀧安寺（箕面寺）を通り過ぎ一の橋を渡ると、商店が軒を連ねる道筋と歓喜天

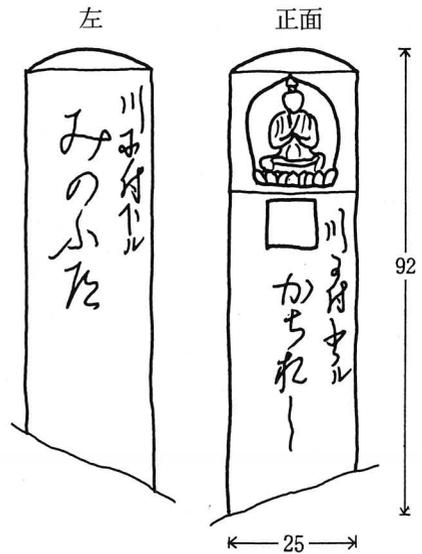


霊場の道標の立つ坂道とに分かれる。かつては左に道
をとり、西江寺を経て中の坂に至ったものであるが明
治四十三年三月十日に阪急電車が開通し、土産物店で
賑う道筋ができた。

五九 政の茶屋の道しるべ

排気ガスやほこりをかぶり、ガードレールの影に身
をひそめるように立っている。倒れんばかりに傾いて
いるこの道標は頭の上に馬頭をいただいた観音菩薩の
坐像が浮き刻りにしてあり、川にそって上れば勝尾寺、
下れば箕面であると案内してある。馬頭観音は憤怒相
で、馬に乗って外敵をけちらし、悪に向う善の怒りを
あらわしている。

馬と縁の深かった道の往来と観音霊場の案内に、道
中の守りを願ったものと思われる。





六〇 三宝荒神参道の道しるべ

現在地 箕面公園

ドライブウエーより滝道に下りた所に大きな道標が立っている。三宝荒神は一般にかまどの神として信仰されており、勝尾寺では本堂の西側に堂がある。勝尾寺への道をわざわざ荒神参道と案内してあるのは、願主が食物を商う人であろうか。新しくはあるが、建立者の信仰心をうかがうことができる。

185

正面



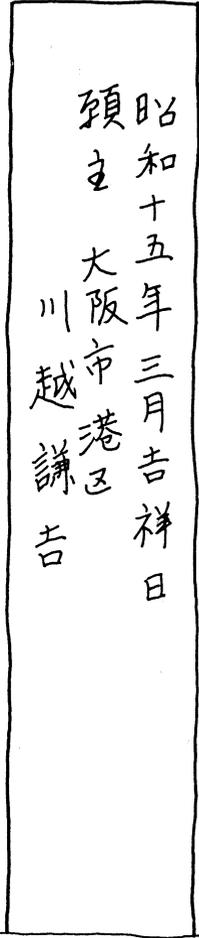
37

右



22

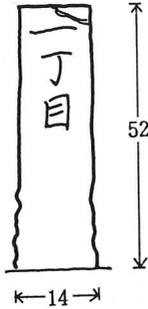
裏



六一 一丁目石

現 在 地 箕 面 公 園

滝壺より滝道を一〇〇メートルほど下った茶店の向い側に一丁目と刻まれた小さな角柱がある。通称箕面の滝は雌滝ともよばれ、少し上流に小さい雄滝がある。役行者がこの大滝の滝面が箕に似ているので、建立した伽藍を箕面寺と号したと伝えられ、滝は麓の里から十八丁と箕面寺秘密縁起にある。但し丁石は新しいものである。

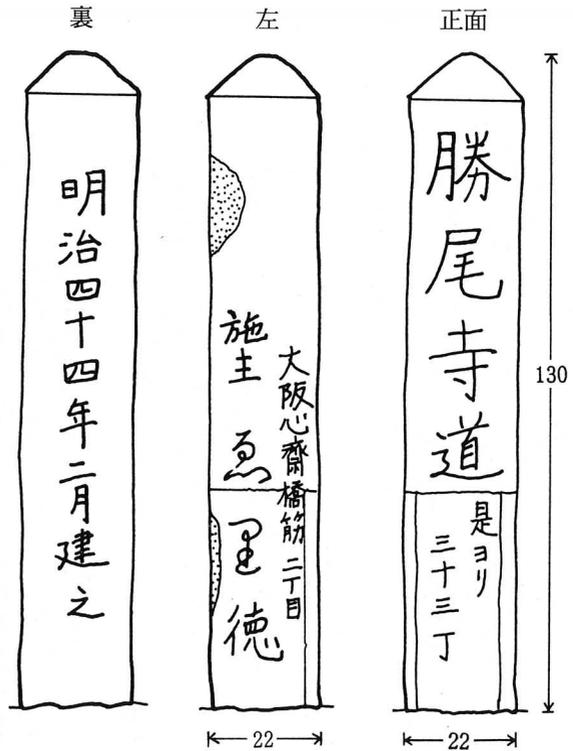


勝尾寺～箕面道

六二 箕面公園の道しるべ

現在地 箕面公園

雄大な滝を目の前にした、ドライブウエーへの坂道の登り口に立っている。勝尾寺まで三十三丁と一里弱の道程を表示し、左面に大阪心齋橋のえり徳と施主名が刻まれている。えり徳とは、和服の半衿の老舗で主人の村田徳松という人が建立した。



六三 六丁目石

現在地 箕面公園

滝道を下っていくと右手の山側から左手の川へ細い谷川が落ちる所に長左衛門谷の標識が立っている。付近は落石予防のため崖を金網で覆っているのだから、そのすそに六丁目の小さな丁石がある。

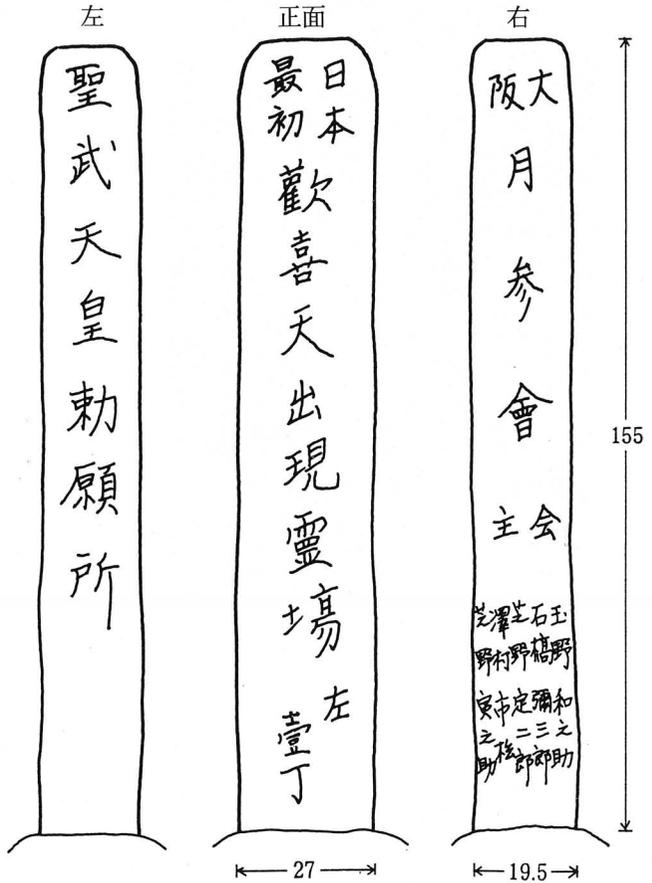


←12→

六四 西江寺の道しるべ

現在地 箕面公園

滝道を下って一の橋を渡ると道は二
 叉に分れる。右手はみやげ物店が並ぶ
 観光通り、左手は「歓喜天出現霊場左
 壹町」と案内される坂道である。
 歓喜天出現霊場とは現西江寺で役行
 者が草庵を結び修行をしていた折に歓
 喜天が出現して励ましたと伝えられ箕
 面聖天として知られている寺である。





六五 箕面駅前の道しるべ

所在地 箕面二丁目九

阪急箕面駅前のバスターミナルから滝道へ向う右側に南向きに立っている。

高さは台座を含めるとおよそ三五〇センチ程、巾五六センチの大きな石標で、大歓喜天出現霊場の案内の

横に小さく「是ヨリ三町」と西江寺への道のりを示している。建立された明治四十五年は阪急電車が開通した二年後で、当初は箕面駅がロータリーになっていたそうであり、近年の駅前開発などもあって位置は当時といくらかわわっているかもしれない。

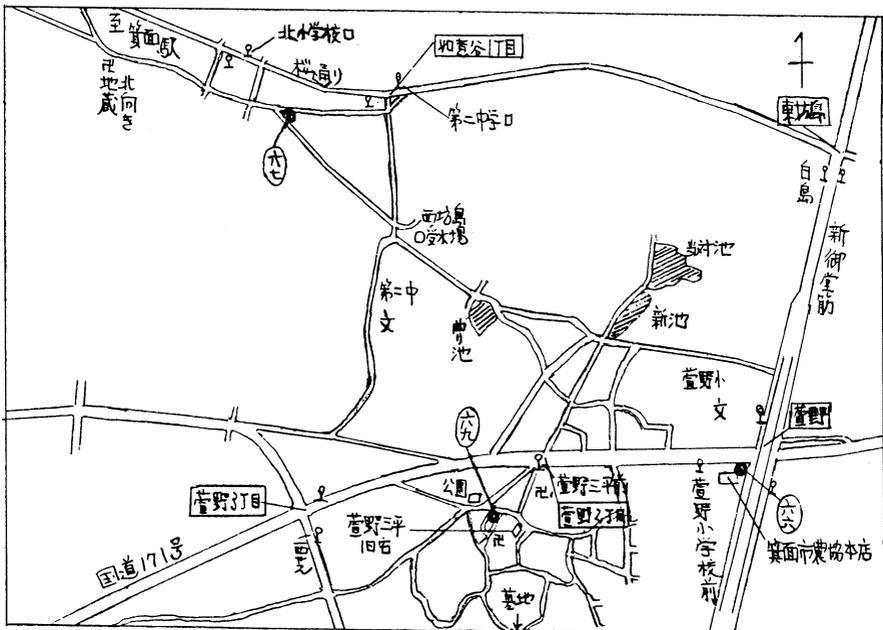
一〇 萱野～箕面道

西国街道を東から歩いて行くと西宿で国道一七一号が分断し街道は木戸ヶ池にそって南側を通り新御堂筋線にでる。この辺りに現在箕面市農協) 旧萱野農協の敷地内に保存されている箕面山の道標があった。

即ち萱野小学校の東側から箕面寺(瀧安寺)へ向う道が街道から分かれて北西にのびる。幼稚園の北で左折し、新池の南、曲り池の北を通過して第二中学校から箕面地域に入る。右の人家の塀の中に半分隠れた道標が目に入ればすぐに巡礼道と合する。巡礼道はまっすぐ西へ向い、箕面の中心地・サンプラザの南側を通過して新稲に向うが、サンプラザの角で牧落より北上してくる箕面参りの道と交叉するので、右折して北へ向うと中の坂から西江寺、瀧安寺に至る。

又、途中北向き地蔵を通り過ぎた三叉路で右手の道を北西にとると、桜通り・ドライブウエーを渡って西へ行き、同じ中の坂に至る近道である。

阪急箕面駅より滝道に入る角に萱野三平舊跡の道標があるが、これは中の坂からこの道を逆にたどる案内であり、西国街道旧萱野邸の付近にこの道標と対をなす三平の墓を示す道標がある。



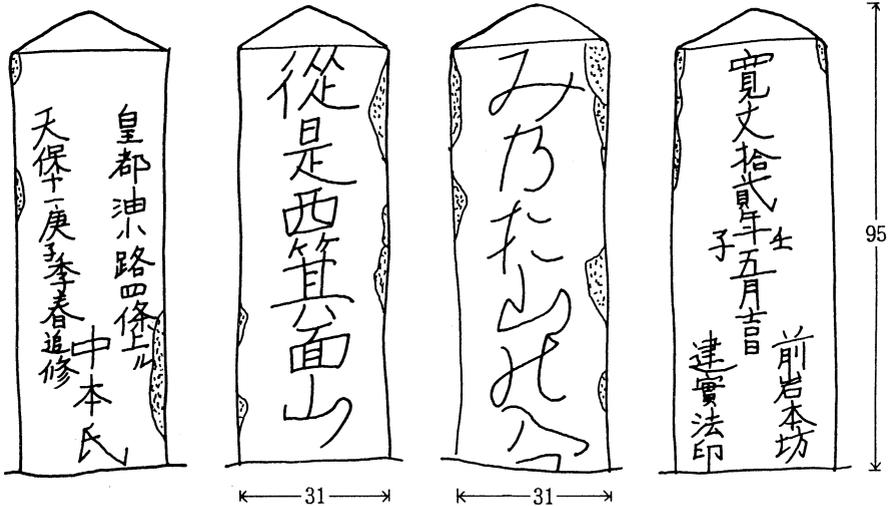
六六 箕面山への遭しるべ

所在地 萱野四丁目三

国道一七一号と新御堂筋線との交差点西南角にある箕面市農協（旧萱野農協）敷地内の築山に道しるべが立っている。

もとは萱野小学校東側、西国街道から箕面に向う三叉路にあったが、新御堂筋線建設のため現在地に移されたもので寛文十二年（一六七二）の銘があり、勝尾寺参道の町石五輪塔婆を除くと市内では銘のある最古のものである。

ところが東面にはこれより一六八年後の天保十一年（一八四〇）に京都の中本氏が追善供養を行ったと刻んである。下部の字が判読できないので、どのようなわけで現存の石標にわざわざ追刻されたのかわからない。



從且定西箕面山

寛文拾貳年五月廿日

康人曾法印

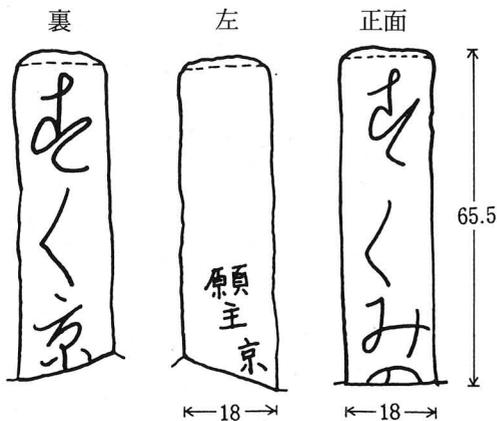
前山石水法印

六七 京・みののをの道しるべ

現在地 箕面四丁目四

箕面に入り北西にのびる旧道を行くと、巡礼道に合する直角の人家の塀の中に、半ば隠れるように道標が立っている。外からはほんの側面しか見えないが、京都と箕面の方向を示す道標である。

願主の名も刻まれているようだが、コンクリートで埋められて不明である。



(京・みののをの道しるべ)



(箕面山への道しるべ)

萱野～箕面道

六八 萱野三平舊跡への道しるべ

現在地 箕面一丁目八

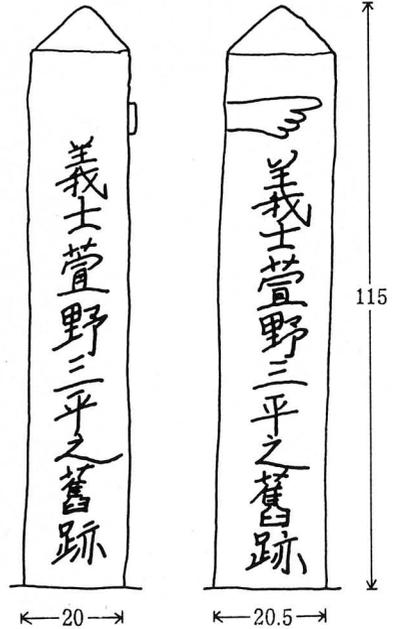
阪急箕面駅で下車、滝道をのぼりはじめの右側に、
義士萱野三平舊跡を右に指す道標がある。

これは阪急電車開通とともに箕面散策の人達のために
建てられたもので、これから右に向うとすぐ中の坂
の道標があり、北向き地蔵を経て東南へ、坊島を通っ
て西国街道ぞいの萱野邸跡に至る。



左

正面



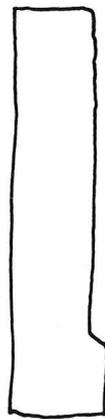
六九 萱野三平墓の道しるべ

現在地 萱野三丁目一〇

西国街道の芝の札場跡の下に、萱野三平の墓と刻まれ指が南をさす道標が立っている。

忠と孝との板ばさみとなり、赤穂四十七士から悲運の脱落者となった三平の墓は、この地区の南の丘陵地の墓地にあったが、昭和五十四年の都市計画の開発により、千里川をへだてた芝共同墓地の中へ移された。

この道標は箕面駅前の萱野邸を示すものと同時に建てられたものである。



← 16 →



← 23.5 →

一一 牧落く箕面道

西国街道を牧落札幌跡で南北に横切っているのが箕面街道で、大阪から箕面寺（瀧安寺）への最短距離の道であった。

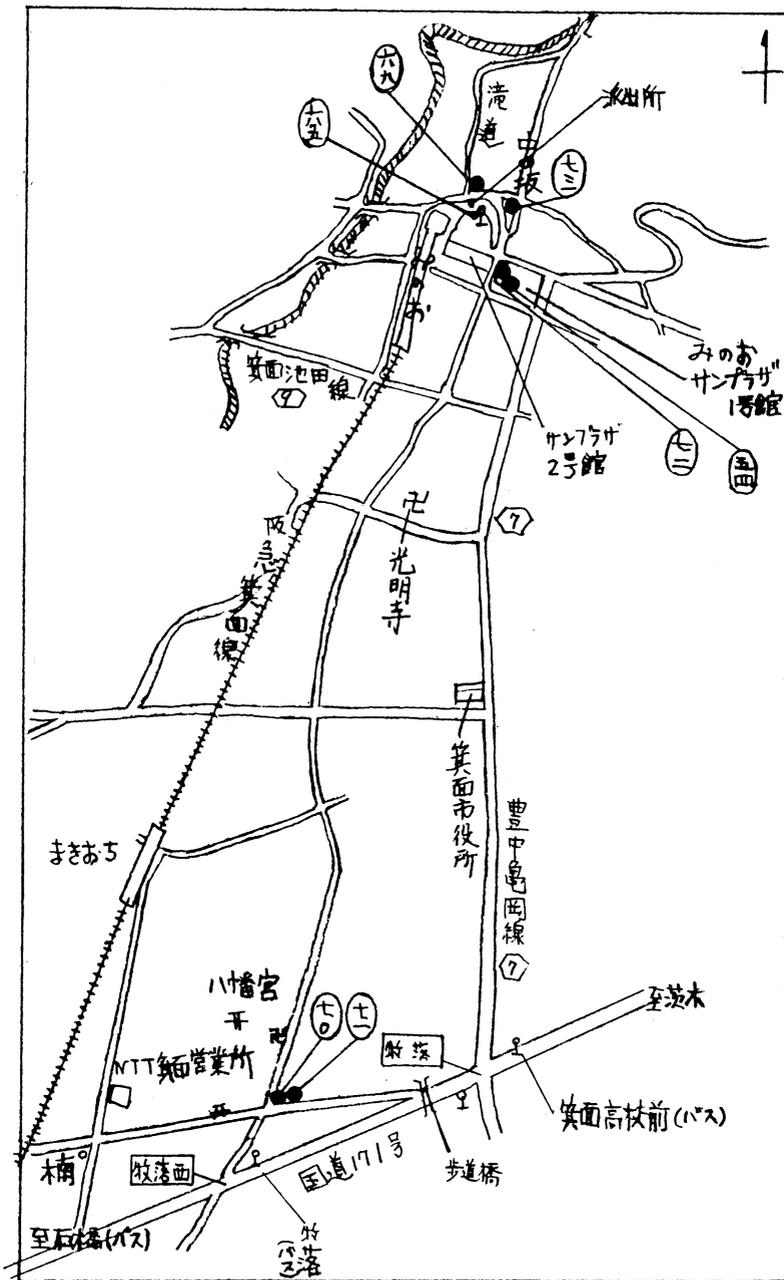
札幌跡には二基の道標があるが、この道は現豊中市曾根付近で能勢街道から分かれ山田街道を横断してまっすぐに北上してくる旧道で、道ぞいに「みのを」を示す何基かの道標に出会う。

西国街道から瀧安寺に向うと箕面商店街の途中、巡礼道と交叉する右角に建つサンプラザ一号館の入口に牧の荘の標石と巡礼道の道標がある。左手に阪急箕面駅を見て中の坂と呼ばれる急坂を登り始めると用水の畔に角柱の道標がある。その先右手の鳥居は箕面聖天と呼ばれている現在は真言宗の西江寺で、その前を通っ

て下り坂に入ると一の橋に至る。これが本来の箕面参道で、箕面駅より一の橋までの賑やかな通りは阪急電車が開通した後に開かれたものである。

一の橋から川にそって滝道を上ると、京都御所より移築したという大きな門をくぐり瀧安寺境内に入る。如意輪観音堂、弁財天堂等を拜んで境内を通り抜けていくのが旧来の道で、朱の橋をくぐる川にそった道は、これも後に整備されたものである。

牧落～箕面道



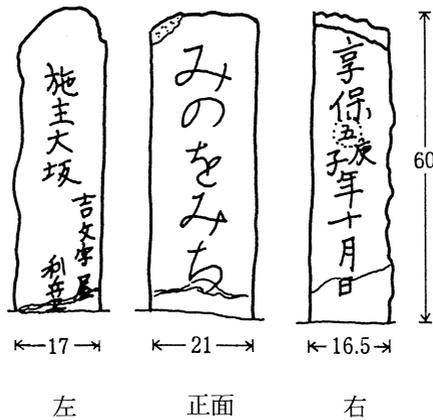
七〇 みのをみちの道しるべ

現在地 牧落二丁目一四

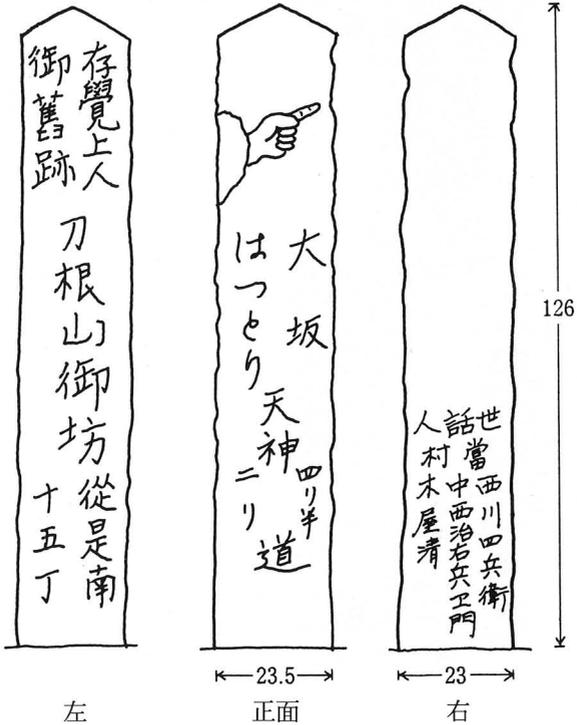
昔、村民に種々の「お達し」を知らせた札場跡が、西国街道と箕面街道の交叉するところにある。

ここに二基の道標があるが、箕面街道に面して立つ道標には建立年月と施主名が刻まれている。

□□庚子年十月の二字目の字画から享保五年（一七二〇）と推測できる。又、施主の吉文字屋利兵衛は、ここから街道をまっすぐ南に行った豊中市春日町二丁目の人家の角に生垣に隠れるようにして立っている道標と同じ名である。



牧落～箕面道



七一 天神道の道しるべ

所在地 牧落二丁目一四

施主はこの村の門徒であり、箕面街道を桜井谷から西へ折れて刀根山へ、又、まっすぐ南下して南桜塚あたりで能勢街道にてて服部、大阪へ向う天神参りの道でもあった。

牧落札場跡の西国街道側に建っている。

この道標には南を指す手が浮き彫りにされ「大坂天神」「服部天神」と共に「刀根山御坊」として有名な常楽寺への道筋と道程を示している。



七二 分水石

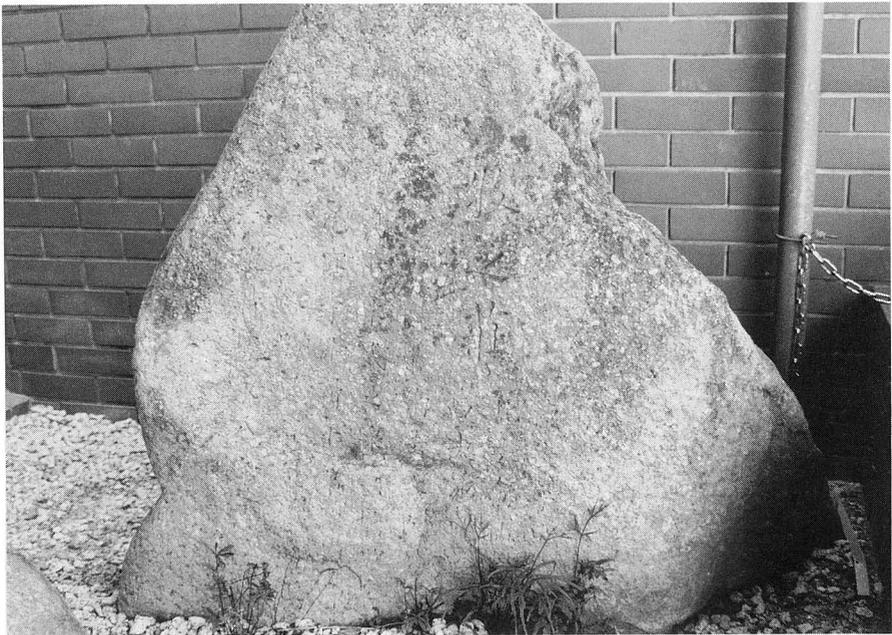
現在地 箕面六丁目三

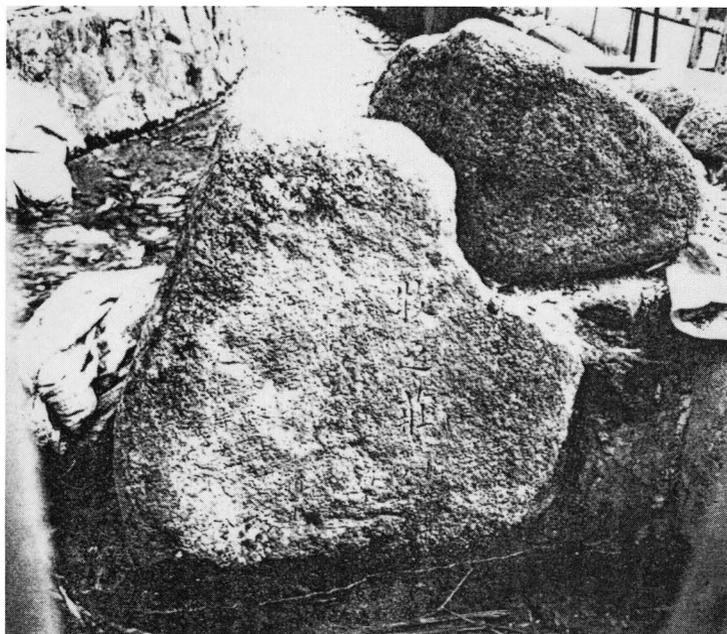
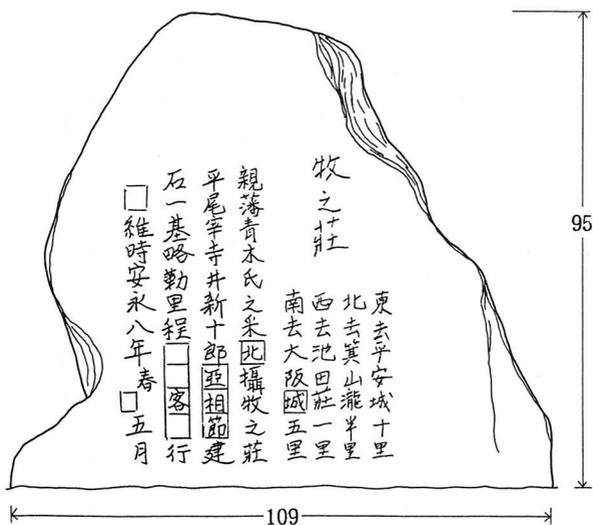
箕面川から灌漑用に引いた小川が、サンプラザ一号館の南西角で二方に分かれる。旧平尾よりまっすぐ南に西小路、牧落へ流れる水路と、東へ折れて芦原池へ流れる水路である。その分岐点の流れの真中に三角形をした大小二個の自然石があった。

大きい方は分水石と呼ばれる牧の荘の標石で小さい方は中山寺への道標である。

この分水石は、当時この地方を治めていた青木氏の許可を得て、平尾（箕面）の代官寺井新十郎が安永八年（一七七九）に建てたもので、牧の荘（平尾・西小路・牧落・桜）の四至（東西南北）を示す標石であると共に、京都・大阪・池田の方向と里程を示している。なお箕面市内の道標に刻まれている「大坂」という文字はすべて土偏であるが、これはコザト偏の阪で「大阪」と記してある。

この標石は昭和五二年一〇月に箕面駅前、市街地再開発ビル建設のため、撤去され現在地に移されている。





箕面の道しるべ（昭和五〇年三月）より転載

七三 中の坂の道しるへ

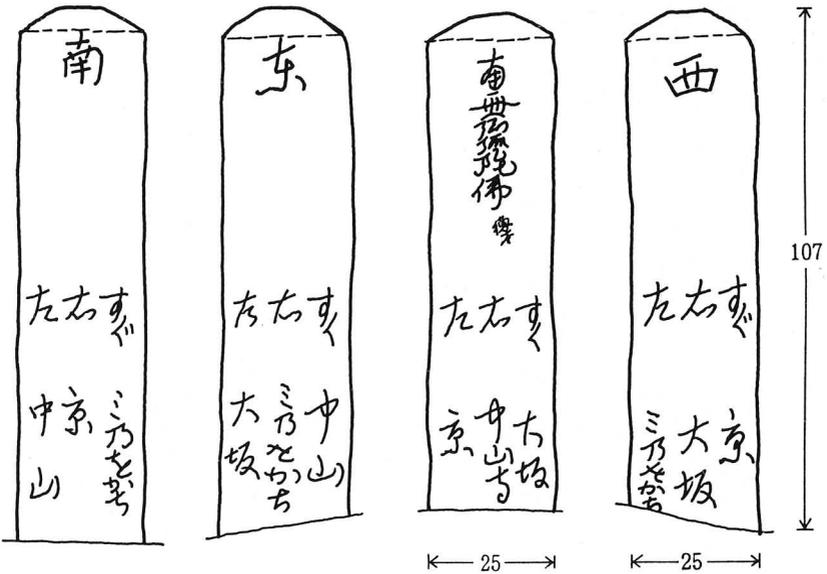
現在地 箕面一丁目九

道標は江戸後期に勝尾寺で念仏を説いていた徳本上人の六字名号が刻まれており、四面にそれぞれ、「京・大阪・中山・みのを」の方向を丁寧に表示している。

阪急箕面駅から東へ一〇〇メートルほどの所に北へ向って中の坂と呼ばれる急な坂道がある。この坂の上り口の水路のほとりに角柱の道標が立っている。

この場所は、萱野方面から瀧安寺へ、大阪方面から瀧安寺・勝尾寺へ、そして中山寺へと向う交叉点である。



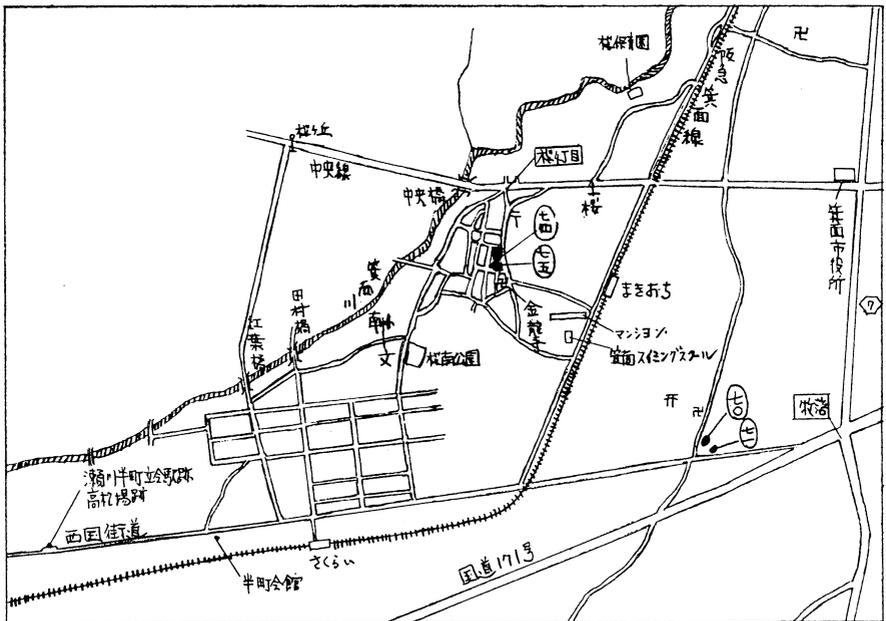


一二 半町～箕面道

西国街道の瀬川・半町立会駅より四〇〇メートルほど東に半町会館があり、向い側に北へ向う細道がある。

この道を北東にたどり南小学校の校庭にそってまわると桜の旧村内に入る。桜の交叉点を斜めに横断し、保育所の前を通って阪急電車の踏切を越え西小路に入ると、西国街道から箕面瀧安寺に向う箕面街道と合する。かつて、伊丹、尼崎等、西の方からの参詣客が行きかったこの道を桜、半町の人々は箕面参りの道ともよんでいる。

桜の旧家中井家では参詣客で賑う頃にはいつも門を開け放ち、邸内に赤い毛氈をかけた床几を並べて湯茶の接待をして喜ばれたそうである。



七四 箕面参りの道しるべ

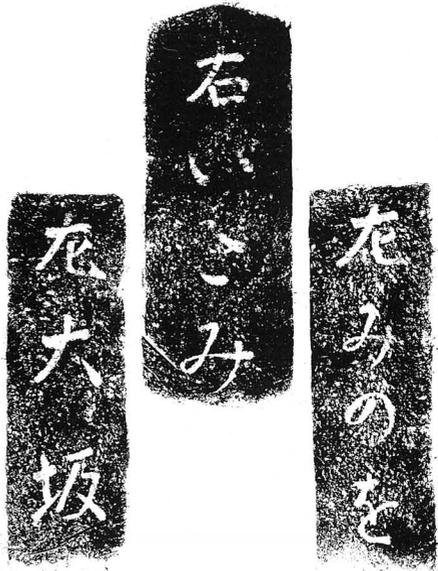
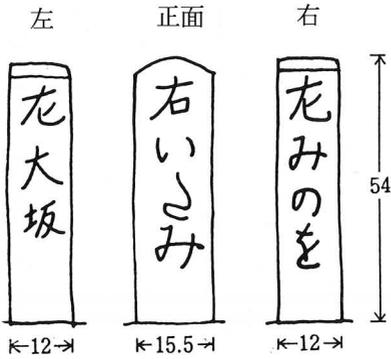
現在地 桜四丁目五

中井家邸内北庭に保存されている道標である。

南面に「右いたみ」東面に「左みのを」西面に「左大坂」とある。

半町より箕面へ向う旧道は中井家の長屋門にそって南側より左折する。

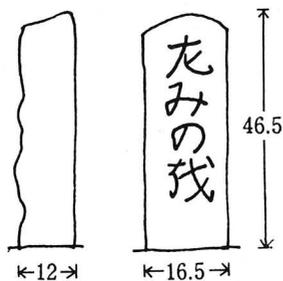
この道標はその南のT字路の西南角に現南面を北に向けて立てていたものと思われる。



七五 桜の道しるべ

現在地 桜四丁目五

中井家の南庭に保存されている道標である。
五〇センチにも足りない小さなもので文字は表面のみである。もとは丁字路の東側に西向きに立っていたもので、道路整備の際に引き抜かれて放置されていたのを保存していたものである。



一三 粟生間谷く茨木佐保道

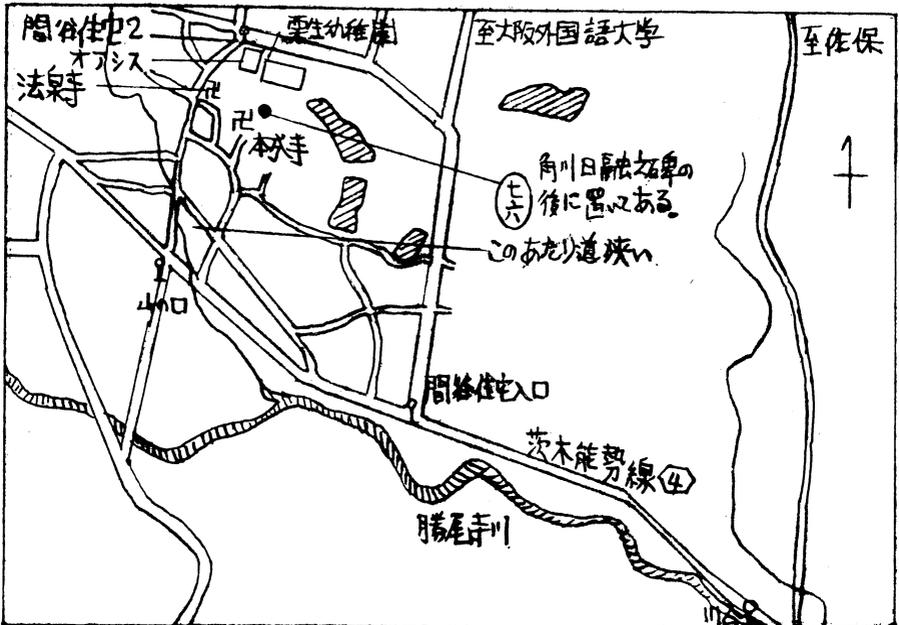
間谷本成寺の裏庭に、「佐甫・国見」への道標が保存されている。

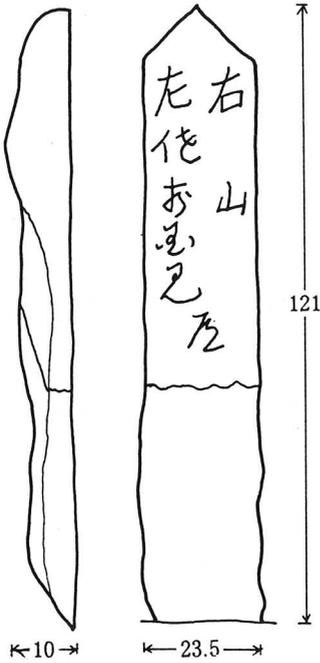
寺の背後一帯が大規模な住宅地に開発され、旧道を確認することは不可能になった。

地図では茨木の宿久庄から北上して佐保に向う道が谷ぞいになる辺りで、間谷山の口から来る道が合流している。

地元の人の話では、本成寺の門前を東へ、池をめぐる北に向い、団地内から山間を東北へぬけて粟生岩阪へ向う道があったということである。古地図によると法泉寺の門前を北東に向って現団地内を通り、山間に入る道がある。

佐保も国見も新旧の亀岡街道にそってある集落で、粟生間谷より山間の道をたどりこの街道を利用すれば、亀岡、丹波方面への最短コースになる。





「左 佐甫 国見」「右 山」と草書体で書かれ、正面だけを整えた板碑のような道標である。住宅地開発のためとの位置はまったくわからないが、山また山の道筋ゆえ、貴重な案内であったと思われる。「佐甫」は茨木の佐保のことである。

七六 佐甫・国見道の道しるべ

現在地 粟生間谷東五丁目二一

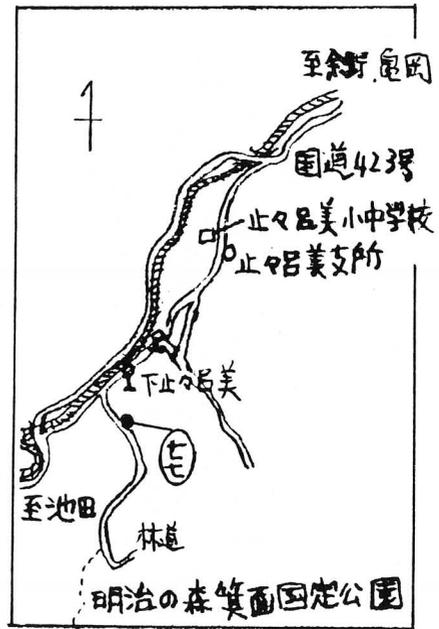


一四 久安寺～亀岡道

止々呂美の中心を走る国道四二三号は、池田市の木部から久安寺の門前を通り、余野川沿いに北へ向い豊能町で亀岡街道と合する。

今は丹波方面からの幹線道路の一つとして、トラック、ダンプカー等の往来が頻繁であるが、かつての旧道は、久安寺付近より伏尾の東側の山腹を縫い下止々呂美に至る。急坂も多く、荷車の利用も出来ず、牛の背が唯一の運搬手段であった幅一・五メートルほどの山道であった。止々呂美村誌によれば、この道も亀岡街道とよんでいる。

上、下止々呂美の村民はこの悪条件を改良するため、明治一三年以来、東能勢村民（現豊能町）の協力をえて余野川に沿った約二キロの新道を開き、同じく一六年一月と二一年五月の工事で現国道の基となる四キロが明治二三年に完成した。

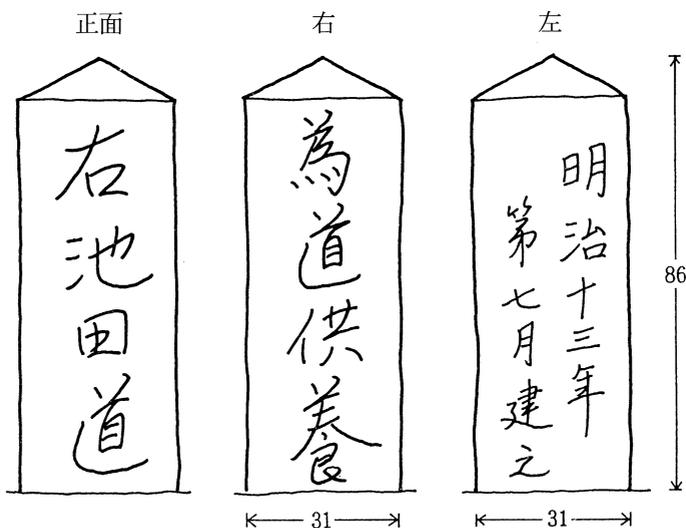


七七 池田道の道しるべ

現在地 下止々呂美一〇〇七

下止々呂美バス停から山側へ約四〇米入った岡田家の庭内に、移転の日時、事情等は不明であるが、明治十三年建立の道供養を兼ねた道標がある。新道開設着工に際し工事の安全と完成を願っての道供養と、竣工までの池田への道を通行者に案内するための道標とを兼ねた碑を建てたものと考えられる。

尚旧亀岡街道には池田市域に「右久安寺」の道標がある。その前に、明和六年（一七六九）に建立された「六字名号」と多数の戒名を刻んだ道供養碑があり、同じ明和六年に同街道の下止々呂美字地蔵にある地蔵立像が建立されている。



一五 その他の道しるべ

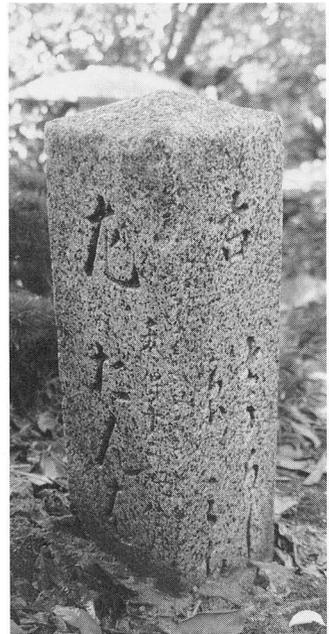
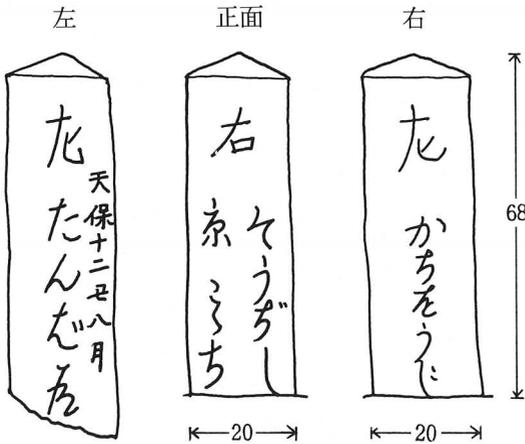
現在、個人の所有となっていているもので旧位置が全くわからないものが何基がある。庭園の飾りとなっているもの、或は全く道しるべの意義を失っているものがあるが記録のため集録しておく。

七八 京道・たんば道の道しるべ

所在地 萱野三丁目五

千里川改修工事の時発見されたという道標が田中邸の庭にある。

「左かちをうじ」「右そうぢじ 京みち」という刻銘からみて巡礼道に立っていたと思われるが、追刻の「たんば道」から、どの場所にあったのか判断しかねる。

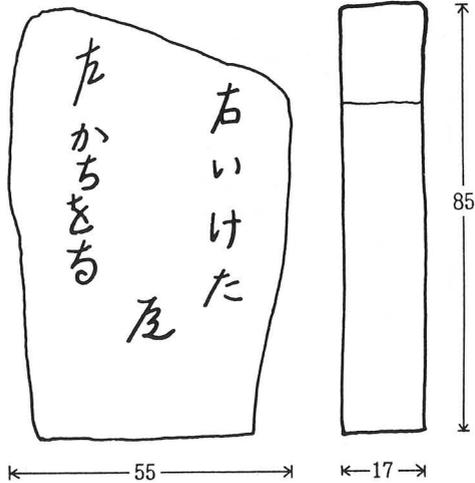




牧野邸内にある。自然石の表面のみを削って刻んだものである。旧位置は箕面市内には違いないが不明である。

七九 池田・勝尾寺の道しるべ

現在地 牧落二丁目一四



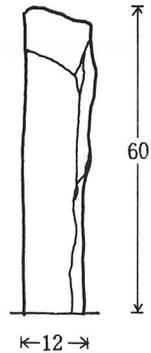
八〇 亀岡・ふくすみへの道しるべ

現在地 牧落一丁目一七

中井邸内表庭に立っている。

福住は、篠山町の東南になり、能勢町には、ささや

ま、ふくすみを案内する道標が何基かある。

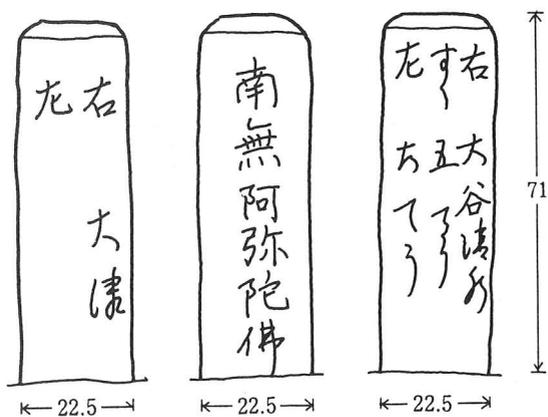




八一 大津道の道しるべ

現在地 箕面公園瀧安寺墓地

瀧安寺の墓地入口に立っている。聖護院とゆかりのある寺で、山門も京都御所より移築したと伝えられるものであるから、何かにまぎれてこの地まで移動してきたものと思われる。京都・東山山麓のどこかに立っていたものであろうか。



資料

勝尾寺参道町石一覧表

鎌倉時代

町石	梵字		尊名(箕面市史による)
下乗石	𑖀	バン	大日如来
一町	𑖀	ウーン	阿閼如来
二町	𑖀	タラーク	宝生如来
左 正	𑖀	バン	大日如来
三町	𑖀	キリーク	阿弥陀如来
四町	𑖀	アク	不空成就如来
五町	𑖀	ウーン	阿閼如来
六町	𑖀	タラーク	宝生如来
七町	𑖀	キリーク	阿弥陀如来

江戸時代

町石	梵字		尊名
十町	𑖀	コク	金剛愛菩薩、金剛鈴菩薩、金剛嬉菩薩

参 考 資 料

大阪府全誌

井上正雄著

大正十一年

箕面市史

箕面市史編集委員会

昭和三十八年

大阪府の歴史

藤本篤著

昭和四十四年

箕面の道しるべ

箕面市教育委員会

昭和五十年

わがまち茨木「道標編」

茨木市教育委員会

昭和五十八年

梵字講話

川勝政太郎著

昭和五十八年

梵字手帳

徳山暉純著

昭和六十二年

摂津名所図絵

二万分の一地形図

大日本帝国陸地測量部

明治十八年

あとがき

平成元年六月本書を作成する為の最初の实地調査が、故笹川隆平前会長を中心に箕面市文化財愛好会々員の有志が集まって開始された。同年十月会長の急逝により、その遺志をついで道標冊子の作成委員会を結成し二年余にわたり、市内道標の調査を実施し整理して、この度漸く「箕面の道しるべ」を発刊出来る事になった。

昭和五十年に箕面市教育委員会が、文化財調査報告第一集「箕面の道しるべ」を発行されているが、今回はそれに掲載されている勝尾寺山門前の下乗町石塔婆は山門改築工事の関係で、未だ設置されていないため写真撮影は出来なかった。また、西江寺裏山の一丁石は失われて発見出来なかった。尚、箕面の分水石も、サンプラザ前に移されているので、当時の様子を偲ぶ事が出来る意味を含めて転写した。

勝尾寺表参道の町石のうち三十六町石から十町石迄は、十三基しか残っておらず、中でも二十六町石と二十八町石は順序が逆に建てられ、各町石間の距離も不定で、何回も工事その他の関係で移転されたい様子がかがえた。また、地元の話聞き、現在殆ど通られていない参道に十七町石・十九町石の二基が建てられているのを見つけたのは今回の収穫であった。

勝尾寺境内の道標も勝尾寺内の建物の改築等により、場所を移して置かれているもの（箕面・中山への道しるべ、一丁石）、横に寝かして置かれているもの（歎喜天道の道しるべ、徳本寺の道しるべ、光明院谷への道しるべ）があった。

今回の实地調査にあたり多くの皆様のご協力を頂き、お陰で八十一基の道標を収録出来た事を感謝している。箕面市内の殆どの道標を網羅したつもりではあるが、尚、見落としている事も考えられるので、今後も皆様のご指摘、ご指導を頂ければ幸いである。

道標は時代の変遷と共に、土地利用の状況が変わり、道路交通、産業、社寺への信仰が変わっても、その時代

の社会事情を知る上に重要な歴史資料的価値の高いものであり、これらの道標を、今後とも貴重な文化財として愛護保存して行きたいものである。

本書作成については、調査、資料整理（写真・実測・拓本）、執筆、編集を、池永征子・池長弘・井口兌郎・岡田昭子・金澤繁子・貴田昇・工藤和子・熊野大助・斎藤千代子・富谷浩・豊田澄・畑一子・松山善一が担当した。

本書を刊行するにあたり、その緒を開いて下さった、故笹川隆平前会長のご遺徳を偲び、慎んでご霊前に報告させて頂きます。

また本書作成について、島田竜雄（本会顧問）小島隆光（勝尾寺貫主）諸氏のご指導、ご助言を頂いた事を記して感謝の意を表します。

最後になりましたが、物心両面に亙りご指導ご後援下さった箕面市教育委員会に厚く感謝致します。

平成三年十二月

箕面市文化財愛好会

箕面の道しるべ

平成三年十二月二十日 印刷

平成三年十二月二十日 発行

編集者

箕面市文化財愛好会

発行者

箕面市教育委員会

印刷

西村印刷株式会社

箕面籠

日照香爐生紫烟
遙看瀑布掛長川
飛流直下三千尺
疑是銀河落九天

李白

又本
其
ふた
みのおれ
ふた
松の戸
たけ
そん
えん
そく

石

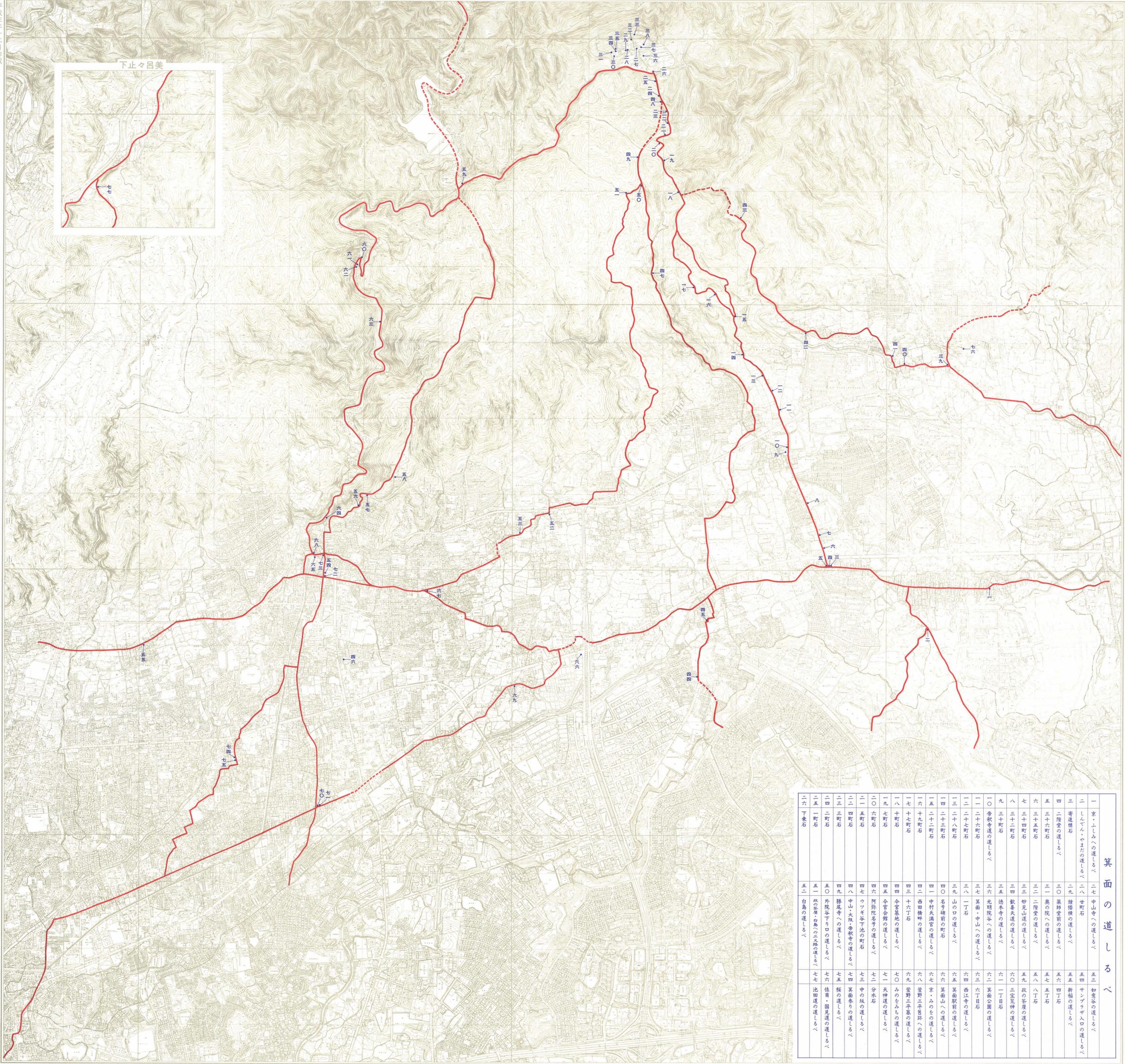
石

水
乃
乃



箕面の道しるべ

平成三年十二月作成



箕面の道しるべ	
一	京・ふみへの道しるべ
二	しんてん・やまだの道しるべ
三	寄道橋石
四	二階堂の道しるべ
五	三階堂の道しるべ
六	三十五町石
七	三十四町石
八	三十三町石
九	三十二町石
一〇	帝釈堂の道しるべ
一一	二十六町石
一二	二十五町石
一三	二十四町石
一四	二十三町石
一五	二十二町石
一六	二十一町石
一七	二十町石
一八	十九町石
一九	十八町石
二〇	十六町石
二一	十五町石
二二	十四町石
二三	十三町石
二四	十二町石
二五	十一町石
二六	十町石
二七	中山への道しるべ
二八	廿町石
二九	鎌橋の道しるべ
三〇	深井堂の道しるべ
三一	奥の院への道しるべ
三二	二階堂の道しるべ
三三	妙見道の道しるべ
三四	欽基道の道しるべ
三五	徳本寺の道しるべ
三六	光明院への道しるべ
三七	箕面・中山への道しるべ
三八	二丁石
三九	山への道しるべ
四〇	名神前の町石
四一	中村天満宮の道しるべ
四二	西田町の道しるべ
四三	今家全館の道しるべ
四四	阿弥堂の道しるべ
四五	今家全館の道しるべ
四六	阿弥堂の道しるべ
四七	ウツ谷下池の町石
四八	中山・大森・帝釈寺の道しるべ
四九	藤尾への道しるべ
五〇	外院下り口の道しるべ
五一	欽基堂・奥の院の道しるべ
五二	白鳥の道しるべ
五三	如常への道しるべ
五四	サンテラザ入口の道しるべ
五五	新橋の道しるべ
五六	四丁石
五七	五丁石
五八	八丁石
五九	政の茶屋の道しるべ
六〇	三堂茶屋の道しるべ
六一	一丁目石
六二	箕面公園の道しるべ
六三	六丁目石
六四	西江寺の道しるべ
六五	箕面駅前の道しるべ
六六	箕面山への道しるべ
六七	京・みへの道しるべ
六八	堂野三平橋への道しるべ
六九	堂野三平橋の道しるべ
七〇	みのをみへの道しるべ
七一	天神道の道しるべ
七二	二分水石
七三	中の坂の道しるべ
七四	箕面参りの道しるべ
七五	藤尾への道しるべ
七六	笹の道しるべ
七七	池田道の道しるべ

1 : 10,000

ワールド航測コンサルタント株式会社調整

箕面市

